

## 「座談会・仏教とマルクス主義」

——一九三〇年の『中外日報』——

林 淳

### 解説

『中外日報』は、仏教系の業界紙の老舗であり、仏教各宗派に関わる時事的な話題を掲載し、関係者の間では広く読まれてきた新聞である。ところが一九二九年頃より『中外日報』の紙面には、マルクス主義と仏教に関する記事や投稿が増え、一九三〇年にはピークを迎えて、マルクス主義と仏教に関する記事、あるいはマルクス主義者による宗教論、それに対する反論が絶えまなく掲載された。また『中外日報』が主催して、マルクス主義者と宗教学者を呼び、一月十六日に「マルキシズムと宗教」、三月十八日に「仏教とマルクス主義」と銘打った座談会が開催された。

「マルキシズムと宗教」は、大鳳閣法界雜祖社と中外日報東京支社の共催で開かれた。『中外日報』一月十二日には、予告の記事が載っており、参加者として長谷川如是閑、三木清、神近市子、室伏高信、北沢新次郎、大宅壮一、江口換、三枝博音、宇野円空、服部之総、村松正俊、本莊可宗の名前が挙がっていた。しかし当日の座談会に出てきたのは、長谷川如是閑、宇野円空、江口換、高津正道、村松正俊、大宅壮一、服部之総、三枝博音であり、司会は真溪蒼空朗がつとめた。三木清、神近市子、室伏高信、北沢新次郎は、参加しなかった。座談会の記録は、「マルキシズムより検討したる宗教」として二月四日～九日、十一日、十三日に『中外日報』に連載された。二月四日版には、つぎのような趣旨の説明と、次回の企画も予定されていることが書かれている。

「今や世界を風靡するマルキシズム—それは一切の上に価値の転換を与えつつある。その舌鋒は宗教の分野にも向けられていることは又当然の事である。ここにマルクス主義者しかも宗教の何たるかを知るであろう諸氏の座談の記を公にして宗教界の参考に処する所以である。宇野円空氏の御尽力を特に謝し他の諸氏の熱心なる研究を喜ぶ次第である。尚ほ次に宗教より見たるマルキシズムの高見を更めて拝聴する期があることを待望する」

「マルキシズムと宗教」は、大鳳閣書房から出版された中外日報東京支社編『マルキシズムと宗教』に付録として、「マルキシズムと宗教座談会」という名称で再録された。

『中外日報』三月十四日版には、同月十八日に「仏教とマルクス主義座談会」があることが公示された。参加者は、木村泰賢、矢吹慶輝、高島米峰、宇野円空、小野清一郎、二木保幾、川合

貞一、古野清人、長谷川如是閑、河上肇、猪俣津南雄、服部之総の名前が、順不同と断り書きが  
あって挙がっている。当日近くなって、河上肇は労働党委員会が出席を中止するように決議して、  
参加できなくなった。猪俣は新潟の母親が悪くなり、急遽、新潟に帰ることになった。それに代  
わって本荘可宗、村山知義が参加した。仏教側でも高島米峰、小野清一郎など欠席者が出た。当  
日参加したのは、長谷川如是閑、服部之総、川合貞一、村山知義、宇野円空、矢吹慶輝、二木保  
幾、古野清人、木村泰賢であった。この座談会の記録は、『中外日報』四月十二・十三・十五～  
二〇・二二～二七日、五月一日に掲載されたが、書籍に再録されることはなかった。そのために  
「マルキシズムと宗教」ほど知られることはなく、ほとんど資料として使われることはなかった。

今回、資料の翻刻にふみきったのは、本資料が、一九三〇年のマルクス主義を考えるうえでも、  
この時期の宗教学の台頭を再考するうえでも欠かせない内容をもっていると判断したからであ  
る。翻刻者は、別に論文を作成して、本資料の内容を検討しているので、参照いただけると幸い  
である<sup>(1)</sup>。ここでは、二つの事柄について言及しておきたい。

第一に、座談会の企画者についてだが、真溪蒼空朗、三浦参玄洞であったと思われる。二人は、  
中外日報東京支社の記者であった。真溪は、創業者であり社長である真溪涙骨の息子であったが、  
マルクス主義の影響を受けて、一九三一年に設立された戦闘的無神論同盟に加入している。三浦  
は、社会運動にかかわり、『左翼戦線と宗教』という著作を書いていた。二人の思想傾向は、マ  
ルクス主義と仏教を結びつけたものであったと思われるが、この二人が組んで、マルクス主義、  
宗教界の人脈を生かして、紙面を作成していた。

第二に、本資料は、題名「仏教とマルクス主義」からうかがわれるように仏教者とマルクス主  
義者の座談であったはずだが、実際には仏教側を代表したのは、木村泰賢だけであった。あとの  
参加者の顔ぶれは、宗教学者であった。現場の僧侶、教団の指導部は招かれずに、宗教学者と仏  
教学者が来て、仏教を擁護し、マルクス主義者と対峙したのである。マルクス主義者と仏教者と  
の討論に、僧侶や教団人ではなく、宗教学者が来たのは、なぜであろうか。論証は省き、結論だ  
けを急ぐと、この時代の宗教学者は、個々の宗派、教団の関係者にはできない、宗教一般を鳥瞰  
して宗教一般を科学的な立場から擁護できる、新しい知識人として登場したからである。西洋の  
宗教理論にも精通し、マルクス主義の宗教批判をも咀嚼し、批判もできる能力が買われ、座談会  
に登場したのであろう。マルクス主義が隆盛をきわめた時代は、同時に宗教復興の時代でもあり、  
そしてまた宗教学者の台頭の時代でもあった。

## 註

- (1) 林淳「一九三〇年、マルクス主義と宗教学者の論争」(『人間文化』二二号、二〇〇七年)、同  
「マルクス主義と宗教起源論」(磯前順一・ハリー・ハルトゥーニアン編『マルクス主義とい  
う経験—1930-1940年代日本の歴史学』青木書店、二〇〇八年)

## 凡例

一、底本は、『中外日報』のマイクロフィルム版である。

一、旧字などは、通行の字体にあらためた。句読点は適宜補ったところがある。

一、資料中で活字が大きくゴシックになっている箇所は、発言の一部でもそのまま表示した。

一、発言者の名前はゴシックで表記した。

## 佛教とマルクス主義（１）

### 座談会に於ける両派の白熱戦

（於東京伝通会館，中外日報主催）

三月十八日夜，東京伝通会館に於いて開いた中外日報社主催の「佛教とマルクス主義座談会」は当時所報の如く教界空前の試みのこととて斯界に一大センセーションを与え，これが速記録の発表を非常に期待されていた。然るに本社は満全の上にも満全を期すべく座談会出席の諸氏に対し更に速記録の厳密なる校閲を請いたるため意外に日時を費やしたることを読者諸賢に謝する次第である。当日の座談会に出席を煩わした方々は左の諸氏である。

長谷川如是閑，服部之總，本莊可宗，川合貞一，村山知義，宇野円空，矢吹慶輝，二木保幾，古野清人，木村泰賢（イロハ順）

### 宗教として見たる佛教

#### 主催者

是から開会さして戴きます，開会に先立ちまして一寸傍聴諸君，諸師の方々に御詫びをせなければならぬのは河上博士の御欠席の件であります，最初二回三回御願ひに上がりました時は快く御承諾になりました，其儘紙上に発表致したのでありますが，労農党の委員会に之をかけて自分の行動をそこで決定せなくちゃならないと最後に申されました，労農党の委員会にかけられました所が，労農党委員会では出席を中止せよと云う決議になりました，残念ながら河上博士は此席に欠席しなければならないことを報告されたのであります，どうか御諒承を願ひたいのであります，それから猪俣先生は茲に電報が今日参りました，「ハハワルイキョウユクユルセ」と書いてあります，それで大変驚き早速自動車を以て兎も角御顔だけでもと懇願に上がりましたけれども，是から新潟の母の下に行かなければならないからどうか勘弁して呉れと云うようなことで止むなく是も御欠席になった訳であります大変申訳のないことであります，それに代わりましてと云うと語弊がありますが，本莊可宗さん，それから村山さんと御這入り下さることになりました。村山氏は始め基督教信者であつたようであります，それから後佛教，それからマルクス主義と云う風に今では純マルクス主義から佛教を批判される立場に居られるのであります，本莊可宗さんも申上げるまでもなく皆さん御承知のことであろうと思います。一寸御詫び傍で御報告申し上げます。それから今日の座談会の司会を佛教文化協会の古野さんに御願ひした訳であります。どうか是も御諒承を願ひます。今日は諸先生の座談，所謂マルクス主義と佛教に関する研究の座談を承るに付て是非にと申される方が余り多数でありましたために茲に聴衆席を設けまして御聞きを願うことになりました。単に御聞き止め置きだけに願ひまして，如何に議論の華が咲きましても拍手とか賛成，不賛成或は私論を挿むことを御断り申して置きます。それではどうか古野さん・・・・・・・・・・。

古野 古野でございます。佛教とマルクス主義との問題を佛教学者，佛教者，マルキストの両方

面から討論して戴くようになっているのであります。それを凡そ十時迄の時間を以て、約三時間、第一の一時間を宗教として見たる佛教、第二時間は世界観として見たる佛教、第三は教団として見たる佛教、そう云う方面から凡そ議論して戴きたいと思うのです、講師の方々を一々御紹介するのも何でございますが、私から茲で申し上げます——全体に於きましては私の右の方が佛教者の立場で、左の方が左翼の方（笑声）、それから念の為に御断りして置きますが可なりデスクッションが進みますと講師よりも聴衆の御方の方が興奮なさって拍手喝采、野次を飛ばすようになるかも知れませんが、そう云うことは絶対に慎んで戴きたいと思います。

**服部** 此頃中外日報で見たのですが、本願寺の職員が、どう云う職員か忘れましたが、本願寺の職員の方面から近來のマルクシズムからの宗教批判は基督教には妥当するが、佛教には当たらないと云う所論を拝見したのでありますが、之に就て佛教学の見地から一体どう云う風な事になるでしょうか、茲から問題を出したらどんなものかと思ひます、非常にジャーナリスティックな問題ですが・・・・・・・・。

**矢吹** 唯今古野君の言われた宗教としての佛教に前の一時間とか、哲学としての佛教に一時間とか、時間割で決めるのですか、或は題を三つ置いて混線して構わないのですか。

**古野** そう云う時間割にして厳密に行かなくてもやって戴いた方が却って宜いではないでしょうか。

**矢吹** 大体一時間として今のをそれに依ってやって行く訳ですね、最初の一時間はそう云う風にして・・・・・・・・。

## 佛教とマルクス主義（2）

**宇野** 服部君自身どんな意図だと思われまふ、今のような議論の出てくる根拠ですね。

**古野** それについて一寸本荘さんから御話になる方は起立して戴いたら如何と云う話がありますが、座談に起立し戴くのは非常に失礼でございますが、聴衆諸君の為に特に起立して話して戴けば非常に結構だと思うのであります。

**矢吹** 今の服部さんの御話ですが、今迄宗教学の方で宗教の定義や何かを云い出す時に西洋の思想が這入って居るから神と云うものの考なしに宗教を考えることが出来なかったのに、宗教学者が段々佛教を見ました時に人間以上と云う言葉を使ったり即ち神と云う言葉を使わないで超人即ちスーパーヒューマンと云ったり、それを人格的に見る場合に超人者スーパーヒーマン、ビーイングと云ったりする。超人者としてしかもそれが超自然的存在とすると、基督教でいう普通の神の意味であります、佛教の法やその他の宗教の道の考などが這入ってきますと、それがモデルアイされるようになる。神秘不思議の超自然たることを要しない、スーパー、パーソナルな超個人的であれば可いとか、また必ずしも人格的でなくとも可いかという考も這入って来る。其点に就いてはマルキストが宗教に対して一般に加えた批評は重に基督教を眼中に置いて居るように考えられるのであります。尤もフオイエルバツハ以来の宗教起源論などを取入れた点は別問

題になりますが、又所謂教団としての社会制度と云う問題に対しての自ら別問題となりましようが、佛陀の宗教、即ち佛教は世界の総ての宗教の中で何らの神も頼らなかったと云うことだけは著しい一つの特徴でありまして、それを仮に神本位の思想に対する人間本位の思想であるとするならば、佛教は実に人本の宗教であったといえるのであります。それをどう云う言葉で言い現して宜いか、暫く私は人本と云う言葉で宜かろうと思う。キリストの場合でもマホメットの場合でも神に頼らぬということはないのでありますから、佛教は最初こうした意味で人本思想でありましたが、段々二千五百年の歴史がそういうものでないものに作り上げた方面があり、其為めに大分基督教と似たものが出て、それは後の教団論の問題にも交渉を有ちますが、先ず一つそういう違いがあります。それからもう一つは自然的に事物を観察する彼の因果の理法というものは佛教では佛が作ったのではなく、佛の有無に拘らず自然に行われているものとする。神を認めませんから神が作ったのでもない、因果の理法は自然に備って居って佛の有無に拘らず存在するものとする。基督教では正義も愛も両方ともに神に支配されているが、佛教では佛は慈悲因果は自然に行われているとするから、後に発達した佛教では種々な解釈もあるが、衆生の業方、因果律は佛も如何ともすることが出来ないとする。そういう事情でありますから、佛教が他と違っている点は色々ありましようが、人本の思想、自然的の観方、此二つの点はその著しいものと思われる。尤も二千五百年の歴史がありますから、その二つの特点も簡単には言い尽されませんが、此点に基督教やマホメット教との違いがあるという事だけは言い得ると思うのであります。其外にも多々佛教の特色があると思うのであります。宗教としての佛教という点で、その特色中、今直ぐ頭に浮かんで来たこの二つだけを申上げて話を進めたいと思います。

**古野** 唯今矢吹講師の御話に依りまして直ちに本荘氏からの発言があります。

**本荘** 私は唯今の矢吹先生の御話に全く同感であります。実は私の話は一方から見ればそれを裏付けるような結果にもなるのでありますが・・・・・・。ただ此中で——矢吹さんも爾うですが——マルクス主義と宗教との問題の限界及び性質と意味等に付て誤解為さって居る方がいらつしやると甚だ遺憾であると思います、で二、三申上げたいと思います。今日茲で此のマルクス主義と宗教と云う問題が論ぜられます時には、問題の提案の仕方が三通りあると思います。第一は宗教の社会的根拠、第二は宗教の理論的批判、第三は古代的慧智（宗教の名で説かれた）の中から当来プロレタリア文化へ何を寄与するかという観点からです・・・・・・「宗教の批判」なんですが、それは宗教の社会的な意義根拠、歴史的性質。それから宗教が持つて居る所の觀念論的な性質に付て論ずることです。唯今矢吹先生の仰った通りの言葉を私も受取って、レリージョンと云う言葉で含められる「宗教」と云う觀念は私は「他力道」と訳す方が宜くはないかと思ひます、それはスピノザの哲学をエンゲルスが説きます時にも、亦フオイエルバツハのスピノザを説きます時にも御承知の通り、一神教を否定した、万有は即神なりとする汎神教と云う汎神論の名に依つての宗教の否定であつた佛教は本来、一神教や有神論とはいへない。思い出しますが西洋の例を引きますと独逸神秘派と云うのがありまして、それはマイステル・エクハルトと云う人が首将であります、「神さえも捨てなければ、神は得られない」といいました。これは正統基督教にとっては非常に愕然たる、意見であります。人間は神さえも捨てなければ神は得られない、それは表面は宗教の形で説出されたが、宗教の否定であつた。そう云う風なものが段々伝

わって参りますと云うと、汎神論から無神論——他力主義（宗教）から現実主義（唯物論）と展開していくのであります。スピノザやエクハルトの言葉が宗教と云う觀念の中に這入るか這入らないか。私は這入らないと思う。宗教とは救主と彼岸と救済との三つを必至条件とするものでなければならぬ。宗教と云う概念は他力道と云う言葉が一番當って居りはしないかと思う。この三つの条件を超越するものは宗教の項目の下に含まれた非宗教である。古代では総ての智慧は宗教の名の下に語られましたから・・・・・・・・。

もう一つ唯物論と云う方面から見ますと唯物論に対する誤解がある。唯物論では心的平安は得られないという。併しそれは実は唯物論を否定するにあたって十八世紀の唯物論を難じて居るのであります。エンゲルスは自然科学と抱合しなければならないと云うことを極力言っているのですが、併し自然科学的唯物論に対しては徹底的に批判した。ビュヒネルと云う人の唯物論を極力エンゲルスは反駁した、自然科学を基にした自然的唯物論になると非常に難じた。唯物論と云う時に宗教者が人間の安心の問題や精神問題はそれでは解けないというのは十八世紀の唯物論、自然科学的唯物論、機械的唯物論、力学を指したのであります。マルクスが説いた弁証的唯物論と云うものは人間の主観的能動的方面は觀念論から——そして世界觀の基礎は唯物論から取り入れた。そして両者を夫々揚棄して統一したのであります。真言の言葉で云うと色心不二と云う言葉に當ると思う。

日本に於てはマルクスは二つの文献から来て居る、一つは独逸であるマックスアドラーがマルクスの唯物論をどうかして基礎付けるために觀念論の傾向に走った、其ためにマックスアドラーやルカッチ等を批判することは独逸ではマルクスの唯物論を弁護するために必要であつた。そこで觀念論の危険を極端に警戒した 第二にも露西亜に来てからはボグターノフの経験一元論がマツハやアベナリユウスの経験批判主義の危険に墮つたために極力マルクス主義のマツハ主義化への危険が警戒された。其ために日本に来ますマルクス主義の文献と云うものはみな第一に独逸の觀念論化に対する闘争であり、第二にボグターノフの経験批判論に対する闘争である、日本に来ますと、マルクスの唯物論的契機の一面的みがそういう事情からして極力提唱されて、マルクス主義の他の一面、即ち觀念論的契機を取入れるとマルクス主義でないように言うが、是は誤謬であります。日本へ輸入されたマルクス主義の独、露に於ける特殊の事情から生まれた文献に依る故でしょう。殊にエンゲルスが難じたシユタルケは、フウオイエルバツハを評して彼は理想を信ずる、彼は努力を信ずる、だから彼は唯物論ではなく唯心論者だと言ったのを徹底的にエンゲルスはやっつけた。マルクス主義は決して人間の主観的な能動的な側面を無視するものではない。エンゲルスは「フオイエルバツハ論綱」で主張しています。マルクス主義は唯心論と唯物論の統一であります。其觀念論と云うものは其要素の一部を占め唯物論の一部を占めた訳です。マルクスの弁証的唯物論に於きましては嘗て十八世紀に唱えられた唯物論とは全く異がうのだという事を御諒解を願いたいと思つて居るのであります。

次ぎに申し上げたいことはマルクス主義と宗教とは如何なるかという問題になります時に、佛教はどういう立場に立つかという問題は、私は『東洋プロレタリアートが国際文化に何を寄与するか』という点から觀察することは必要ではないかと思ひます。宗教という言葉了他力道と訳するならば、是は佛教に於ては浄土宗真宗の門で、佛教の華嚴天台真言というメタフィジー

クの問題になりますと、これは宗教の範疇に入れられないと思う。妥協的なと云っては可笑しいが、古代の諸国、東洋諸国に於きましては学問というものは僧服の下に語られ、寺院の下に於て持続けられて来た。所謂東洋的な、古代的なのであります。世界発展論としては大乘起信論の如きは諸君が御暇の時にフイヒテの弁証法をひもときなさるならば如何にフイヒテの哲学が働自体というものから万有を弁証的に発展させていったか、同じ様に大乘起信論では真如というものから一切を発展させて行ったか真如の反対分——障害として無明というものが出来た。しかもそれは結局は真如に納まって居る華嚴も亦エンゲルスの自然弁証法の要素を基だ神学的、東洋的、古代的に表現したものに外ならない。これ等は「東洋プロレタリアートが国際文化に何を寄与するか」の一つの発見だと思う。

**木村** 一寸伺いますが、マルクスの宗教というものは、マルクス自身の宗教観は簡単でしょう。極めて簡単なものをそれを後の人たちがデヴェロープさせたんでしょ、で何れをマルクスの宗教観と云うのですか、ブハーリンとかデボーリンの宗教観は別として……。

**本荘** レーニン等は宗教の社会的意義を根拠に論じた。私は今申上げました通り、デボーリンやルナチャルスキーの逡巡した東洋プロレタリアートは国際文化に何を寄与するか、という観点から佛教を論ずるつもりでした。が併し今日社会的に存在して日本の政治的意義に於てどういう役割を有つて居るかという点から、哲学は別として、佛教なるものの存在は矢張りやつ付けなければならぬものと思います。

### マルクスの宗教観は

**木村** マルクスの宗教観というものはマルクス、エンゲルスを通しての宗教観、レーニンの宗教観はレーニンを通してのマルクスの宗教観——ではないんですか。

**本荘** マルクスの場合には現実が問題である。宗教は心理的の現実の以外に何ら現実の変革ということの問題にしない。心理の変革を以て満足する。心理は現実の反映であるから現実的な変革が一切の基礎でなければならない。ことに総ゆる存在は社会的存在だから「社会的」観点から批判したようです。

**矢吹** 今の本荘さんの場合でも、佛教は色心不二と説く。だから佛教は決して唯心論だけではないのであって、唯物と唯心との中道、丁度折衷総合で行って居ると私は了解して居るのです。だが併し佛教は拝むですね マルクスはどうしても拝まぬ。何者も拝まない。佛教は何者でも拝む。そこに大きな違いがあるように思われます。そして他力ばかりが宗教でないであります。

**本荘** 佛を求め法を求む。是れ這業と云うことがあります。

**矢吹** 西洋人は何時でも不二という言葉オリエンタルコントラディクションなどなど言っている。それは論理の拒中原理を犯して居ると見ているが、それは兎に角、拝むことがなくちゃ佛教にならない。マルクスは何者も拝まない。そこが最後の違いになってくる。ナチュラリズム、ヒューマニズムは、佛教はマルクスよりも深刻に考えて居るのではないかと思う。拝むのは何だという問題になるとそれは或は次の問題に移したら宜いのかも知れませんが。そこが違いになって居ると思う。

### 華嚴天台と宗教 宗教は他力道だけか

**二木** 私のは極く簡単ですが私は先刻本荘さんのお話を聴きまして、或程度までは私はそういう

考で居るのです。私は第一の点に就て斯ういう考を持つて居るのです。本荘さんに依ると宗教の何であるかは、西洋などの宗教学の書物などの示して居る定義に依ると、要するに他力道ということで答えることが出来る其宗教の定義から言えば、今本荘さんはマルキシズムと一致して居ると言われた華嚴天台中論そういったような教は宗教ではなくなつちまう。そうすると結局マルキシズムの唯物弁証法と、そうして大乘仏教の、殊に悟りという方で行こうというような非常に哲学的の色彩の強い部分とは調和するが、併し宗教とマルキシズムは調和しないというようにとれるようであります。之に就て此处で議論すると、結局私は宗教の定義を議論するということに帰着すると思うのです。そこで例えば本荘さんは、宗教の本質は他力道である。所が一方、いやそうでない。華嚴天台の説く所のものは他力道ではないが宗教である。即ち自力の宗教である。斯ういうことになりますと、宗教の定義の争いである。そこでどつちが正しいかということを決する場合には、色々な標準を持つて来なければなりません。私は結局斯うした定義の争いの決定は出来ぬと思うので。エンゲルスも定義というものは余り重んじなくて宜いということをやつて居るので、定義に就て争うことは余り大切なことではないと思うのです。そこで問題はそういう華嚴天台中論等に現れて居る所の佛教的教へそれがまあ本荘さんの立場から言えば宗教でなくても、私は宗教と思うのです。それで、其宗教であるなしは別として、此両方を考へて見る必要があると思うのですが、其場合に、私の考へる所に依りますと、マルクスの唯物弁証法と、そうして華嚴天台中論—天台のことは私は余り調べて居りませぬが、華嚴や中論等の説く弁証法とが余程一致して居る。私の考では一方は宗教に到達する一涅槃とかいうような成る宗教の目的に到達する段階としての、そこへ行く道としての弁証法である。所が唯物弁証法の方は、此現象世界を説明する場合の一つの、何と言いますか、直観でもあるし、又反省せられれば方法でもあると、斯う私は考えるのでありまして、一方は其弁証法から謂はば上の方に向い、物を更にアウフヘンして、そうして彼岸へ—即ち中論其他、華嚴等でも結局空と言つても差支えないと思うのですが、空というような悟りの境地へ行こうとする。一方はそうでなく、例へば華嚴で言へば事法界に臨んで、それを学問的に説明する一つの指針となる。斯ういう違いがあると私は思うのです。そこで唯物弁証法がそれだけで以て吾々の生活の全部を掩うて居るとすれば、そうすると此華嚴天台中論等に於て終極の目的とする涅槃というようなものは吾々の生活以外のものになる。所が私は涅槃とかいうそういう意味の彼岸、即ち先刻矢吹先生が言われた何等かのシューパーパーソナルな或る物ではありますけれども、それは決して神秘的なものではないと思うのです。それは神なんていうような神秘的なものでない。そういう此涅槃という境地へ到達しようとする宗教的努力が無意義であるかどうか、或は無意義なんというよりも、それが今日の社会にも全然ないものか、又成立し得ないものかどうかということも無論問題になつて来はしないかと思うのであります。宗教としての佛教と、マルキシズムとの関係を見る時に此点を目安に置いて私自身は常に見ているのですが、そういう風に私は考えて居るのです。で唯々単に唯物弁証法で人間社会のことを説明するということではなく、説明は科学的でなければならぬが併し宗教としての生活は又別にある。其別にある所の宗教生活に佛教と云うものの意義があるので、華嚴天台中論が、縦んば本荘さんの定義では、宗教ではなくメタフィジックスであつても科学的に説明すると云う方面以外の今申したような意味の方面に向はうとする努力が其中心点を成して居ると思います。一寸今思いつきましたから是だけのことを申上げて置きます。



矢吹 それは本荘さんのようにすると、日本の佛教だけです。狭く佛教をとつてしまつたので……。

本荘 今二木さんからお話がありましたのですが、華嚴天台の信仰なんかは、宗教へ到達する所のプロセスである。マルクス、エンゲルスの方は現実変革の理論であるからと云う分け方がありましたのですが、是は非常に勝手な考なんでありますが、どうも宗教の真意は宗教を捨てた所にあると言う。私はそれで唯々それでは凡夫には分からないからして、其時の時代的社会的制約、其時代のイデオロギーからやつた……。

矢吹 但し結局拝むという問題なんです。

古野 一寸……服部君が何か一非常に簡単なようでありますからお聴きを願います。

#### 佛教の彼岸主義 教団現象について見る

服部 二木さんの御意見に付ては、後に廻しまして、矢吹さん、それから本荘さんのいわれた問題に付て簡単に意見を述べます。本荘さんは、マルクスの唯物弁証論は観念論と唯物論とを揚棄したものだというようにいわれましたが、殊に宗教を論ずる場合には、どうしてもマルキシズムの唯物論とそれから他の哲学の観念論とをハッキリした対立に於て見る必要があると思います。心と物とがどつちが先にあつたかという場合に物が先にあつたという唯物論に対して心が先にあつたという観念論がはつきりと対立します。宗教一般と唯物弁証法との対立は先づ観念論と唯物論との対立を媒介としてでなければ理解されないと思います。媒介としてというわけは、マルキシズムの立場からは宗教—宗教性といひます—宗教性は、観念論そのものではないが、観念論から発生し観念論を基礎とするものです。観念論哲学が、更に或る他の物に転化した時に始めて宗教というものが生れて来る、斯ういう風に考えられる。他の物とは何かといひますと、所謂シューパーナチュラルの存在を認めて、それに依つてナチュラルな、又人間的なるものが導かれるという見地です。こうした彼岸主義の中にマルクス主義の宗教観はダス・レリギエーゼなるものの本質を認める、斯う考えます。本荘さんが他力道を宗教だという言葉も、今のような意味では納得出来ず。それから、そこで今度は矢吹先生に対する—矢吹先生に依ると、佛教に於ては神が無い。所謂シューパーナチュラルなものがない。第二に自然本位である。人本的である。此点で神を立てる所の基督教と違う。併し又他方では拝むということがあるから、だから佛教も矢張り宗教である。で之に対してですが、佛教に於いても、僕は矢張り佛教は宗教だと思うので、と云うことは、佛教に於ても彼岸主義がある。それは浄土真宗なんかをとつて見れば最も端的に現われて居る。それから佛教学者がどんな風に各々の宗乗なり、或は佛教概論なりの中から、神なり或は彼岸的なものを哲学的に除去して説明しようとも、現実の信仰を持てる大乘、善男善女達に於ては天台だつて真言だつて加持祈祷はやりまじ、真宗に於ては所謂他力主義があるのですから、教団現象について見るとき、どんな佛教だつて矢張り彼岸主義はあるのです。所が他面に於て佛教的思惟を探つて見ると、單に彼岸主義で片付けられないものがある。寧ろ彼岸主義を否定する所の見方がある。それは二木さんが言われる空観に於て最も著名でありまして、空観に於ては彼岸主義は否定されて居ると僕は考へて居る。二木さんに対する僕の反対は何れ中外に出ますが、矢張り二木さんの考へ方は彼岸主義と此岸主義とを分別して居られるように思うのですが、それは空観哲学の中では統一されて居る、斯う思うのでありますが、兎に角一つ思想体系として、佛教の中に形而上学的の、所謂基督教の彼岸主義、詰りマルクス主義的に見たる「宗教的」

なるものが否定されて居るような論理がある。そういうような宗教的のものを否定する論理に対して、之を僕は佛教に含まれて居る弁証法だと思うのでありますが、其弁証法的なるものから、今日あるような佛教に於て見られるような彼岸主義がどうして出るか。これは佛教以外の事態から起つて来る現象—詰り佛教の墮落であるか。それに就ては僕はそうでないと思う。矢張り佛教の世界観の体系自身の矛盾からの結論だと思うのです。其矛盾は何処にあるかと言いますと彼岸主義を否定する根拠は、佛教に於ける弁証法的のものである。弁証法が徹底したら、そうしたつて彼岸と此岸を二元的に分けることは出来ない。之に反して其弁証法が佛教に於ては観念論的な土台に立つて、観念論的な構成を持つて居る。其観念論を契機として、自らの弁証法を否定するような彼岸主義の宗教が佛教の観念論的構成の上にそれを基礎として出て来る。斯ういう風に僕は見て居るのです。今述べた点は、いわば純粹に理論的な分析であります、今のように解釈して初めて矢吹先生の言われた、佛教は基督教と違つて居るのは、佛教思想に於ける弁証法的思惟の御蔭である。然るに矢吹先生の言われたように、佛教は他面に於て拝む。其拝むというのは、佛教の体系の一方の基礎である所の観念論から出発する、そう思うのです。

### 佛教とマルクス主義（3）

**宇野** 一寸あなたのお話の彼岸主義と云う奴ですね。大体私に分つて居るのですが、其超自然的のものを認めて、それに依つて何かを獲ると云うように、半分は本荘さんの言われた他力主義と云うものを肯定しても宜いと云うのですね。

**服部** そうです・・・・・・・・・・・・・・・・。

**宇野** そこをもう少し精密にして置きたいのは、超自然的のものを認めるということと、それから、それに依るといふ他力的の要素と少し別なんですね、私どもから言うと、超自然的のものを認めるという事だけに限定して置くか、或は他力主義というものをそこにプラスするか、問題がそこにあると思う。

**服部** それは、あなたの宗教学では、宗教の本質はどっちになりますか。

**宇野** 私等は前者だけです。他力主義というものは取つて退けたい。先刻矢吹さんの言われた拝むということ、やさしく言つて拝むということ——そこを殊更、他力主義とか、或は何かに頼ると云ふことの寧ろネーベンなものを見た方が宜いのじゃないか。

**服部** 同意見です。例えば他力主義という言葉を使えば聖道門という奴は宗教でなくなってしまうという議論を起し易いけれども聖道門だって宗教であるのであるから・・・・・・・・。

**本荘** 聖道門が宗教であると云うのは「古代的」に語られたということです。宗教（他力道）の性質を捨てる訳ではない。ですから僧服の下に語られた唯物論は宗教の形を持つて居る、宗教のように見えるのは、古代では総ての知識は「寺院」で保護されたからです。・・・・・・ただ今日、寺院や僧侶として存在しているその「社会的存在」は明らかに宗教的であります。

**宇野** 先刻二木さんのお話になつた宗教を限定するといふと他力主義になると思う、そこで今のお話の進行上、他力道といふことで今宗教を限定して進めるよりも、ダス・レリギーエーゼは何で

あるかという問題については今服部君の御話のあったように、幾らか寛ろげて、超自然を認めるとか、さう云った意味の彼岸主義とか、そこを見て行って、佛教はそこに這入って居るという具合にして話したらどうですか。

古野 それはそうですね。

村山 其点に就てなんですが僕も宗教をそう云う風に考えたいのです。例えばニーチエの哲学ですね。あれのツアラツストラの考であるとか、或は永遠論題の説であるとか、無論これは佛教に影響されて起った考であります、あれなども一種の宗教として考えたいのです。

でニルバーナの考えが宗教を否定する意義を持って居ると服部君は言われましたけれども、矢張りあれも、僕は広い意味で考えた場合、ニルバーナを認める、或はそれに憧れるということも、宗教的観念、宗教的イデオロギーであると考えたいと思う。唯々吾々が宗教を科学的にそういう風に考えるよりも、もっと宗教の中に於ける広い意味のダス・レリギーエゼを特に取出して問題とするのは、宗教の中に於けるダス・レリギーエゼこそが大きな力を民衆の中に泌みわたらして居る。それが現実の社会に於いて宗教であると考えられ、それが社会の歴史に大きな影響を与えて居るという意味から、吾々は、其宗教の中にあるダス・レリギーエゼを多くの場合宗教と呼んで居るのです。併しもっと科学的に考えますれば、私は、宗教を広い意味にとりたいと思います。で無論、狭い意味に於ける宗教こそ、今日は大きな力を注ぎたいと思いますけれども、それは最後の教団としての宗教の所で論じたいと思います。

## 佛教とマルクス主義（４）

### マルキシズムの宗教性

川合 大分、宗教の本質のような問題が提議されたようでありますが、私も無論宗教と云うものを以て、結局する所、世界観、人生観以外何物でもない、斯う私は見たいと思って居る。そう云う意味からしますと、マルキシズムは即ち一種の宗教であるとも云える、先程も物心の関係に就てお話があつて心と云うものが一つの弁証法的契機だとのことでありますが、無論一つの契機であると思はれるべきでしょう。併しマルクスに於ては物質なるものが根本となつて居るのでありますから、物質が弁証法的に其反対に動いた時に精神となる。斯う見て居るように思われる。そうして見ますと精神というものは物質の運動から弁証法的に出来たものと云わなければならない。でマルクスに云わすれば観念なるものは物質の転置され変形されたものに他ならないのであります。すると、物質運動から精神となるところの何等かのミステックなものをそこに認めて居ると云わなければならないのでありますから、やはりそこにマルクスが考える宗教の要素があると言わなければならないのであります。マルクスは将来社会に於ける経済の凡ゆる関係が見通しがつくようになれば、最早宗教は亡びてしまう。何故かという宗教なるものは経済生活に於ける神秘的なるものの反映であるからであると云うのであります。それでマルクス主義から言えば宗教なるものは結局否定されなければならないものであります、併しマルクスが物質の運動というものを以て凡ゆるものの根源と見て、ミステックなあるものを認めて居るのでありますから

そこにマルキシズムの宗教性が存しているとも云えるのである。是だけ思いつきましたから申上げて置きます。

## 佛教とマルクス主義（5）

### 宗教としての佛教の特質は何であるか

**古野** 凡そ佛教に於きましては宗教者の哲学観と云ったようなものは可なりこんがらがって居るのは、性質上からお話になって居る今の口吻でも可なり哲学としての宗教と云うような要素が可なり這入って居るようであります。此の宗教としての佛教と云うような側のそう云うような問題に付て御話を御希望なさらなければ、其次の哲学としての佛教と云う論題の方へ自然這入ろうと思います。

**木村** 宗教としての佛教とマルキシズムとの関係を、このまま保留して次の問題に移ることは不賛成です。此の問題を決定せぬ内に次の問題に移られては集まった甲斐がないと思う、但し宗教の定義を色々こね廻して居っては甚だ事面倒になりますから、それは次の世界観の時に譲ると致しまして、兎に角宗教としての佛教とマルクス主義と両立し得るものであるか、妥協し得るものであるか、或は是非喧嘩しなければならぬものであるかと云うことに就て先ず意見を定めて置く必要があると思う。それに付きましては佛教も色々ありますけれども、夫等に通ずる佛教の特徴を挙げて、そうして此点に付てマルクスの立場からどう見ると云うようなことに少し議論を進めたいと思います。服部君は佛教の特質も彼岸を理想とする所にあると言われましたが、其点は私も賛成であります。けれども、併しもう少し具体的に佛教の性質を規定して置きたいのであります。私の見る所に従えば佛教には色々の立場もあり、教えもありますけれども、夫等を一貫している特徴は凡ての据りとして、神でもなく自然でもなく、我が心を立つる所にあろうと思う。我心に於て彼岸と此岸とを分ち、我が心に於て極楽と地獄とを建立すといった工合で、心が基本となって然る後に総ては解決せられると云うことが佛教の立場、大小乗を通じてそこに重きを置くのが佛教の立場であると思うのでありますが、そういう風な立場はマルクスの方から云えば、所謂観念論的なものとして、佛教は全然否定さるべきものであるか、或は何らかの形に於て妥協し得るものであるか、それから議論を進めて其次の問題に移りたいと思います。其処を保留して未解決のままにして置くとは甚だ面白くないと思います。

**本荘** 今の信仰の上の話ですが、佛教とマルクス主義と妥協するや否やと云う観点から今日の御話を進めるよりか——妥協の問題とするよりか——そうでなくて私はデボーリンの云った意味から世界各国のプロレタリアート——がここでは日本プロレタリアート——自国の文化のなかから世界の文化に何を寄与するかと云うことを観点にして論じたい。各国のプロレタリアートは夫々自国の文化のなかから今日プロレタリアートの世界観である所の唯物論とその方法であるところの弁証法の歴史に何かを寄与する。其意味に於きましては、東洋プロレタリアートも佛教のなかから国際文化に貢献するところのものを取り出さねばならぬ。佛教とマルクスが協調すべきかと云う問題でないのです。……第二に只今お話の三界唯心であります。今日佛教に於け

る心と云うのは観念論や吾々が云う心と云うのとは少し異うと思う。吾々のいう心や唯心論の意識というのは唯識論の「識」に当りませんか。

**木村** 私は佛教全体に通じる立場を観念論というよりは寧ろ由心論を名けたいと思います。之は西洋には無い言葉ですが、強いて求むれば実践的観念論という語に相当する事と思います。由心論というのは華嚴から来た言葉ですから要するに、心が上位となって凡てを規定するもので物の価値も心によって定まるという意味も含ませて用いたいと思います。由心論という語も分からぬかも知れぬけれども、観念論という語も極めて複雑で且つ曖昧だと思います。之は第二の世界観の問題ですが、そこになるとマルクスと佛教と似寄って居る所が多いから、此の点は本荘君の云われるように東洋プロレタリアートの土産として、マルクスの世界観を豊富にする材料に用いるのが結構だと思います。が先ず第一の問題を定めたいのです・・・・・・・・。

**本荘** 今、川合先生も仰っしゃられたのですが、ミステックと云うことは形式論理に当嵌まらぬことをいうのだと思う、A と not A を基とする論理的思惟の外へはみ出すとミステックという。弁証法的論理は形式論理学を打破する、形式論理に包み切れないと云うことを我々はミステックというけれども、弁証的思惟では包み込んで了まう。

**川合** 私の考えて居るのは物質の運動と云う我々の理解することの出来ない或るものは唯形式的に物質の運動と云ったところが事実は明らかになって居ない、唯それを其儘に取って居ると云う意味に於て私はミステックのあるものを矢張り実行して、佛教の唯心論と同じです、マルクスは唯物になって居ると云うのですが、それは私が説明がついて居ない。見通しが附いて居ない。

**服部** 木村先生のいわれたように、世界観の問題は一つ次に展開した方が宜いと思います。

### マルクスが其時代に攻撃しなければならぬ点

**矢吹** 話の途中ですが、マルクスが西洋でしかもあの時代に考えた宗教観の中に両立しない点、攻撃しなければならぬ点をはっきりして置く必要があると思う。それでないと話が進まない

**服部** 私が今からはっきりしようと思って居るところです、(笑声) マルクス主義の立場から木村氏に対してははっきり御答して置きたいと思います。先ず第一に茲の一般の問題は宗教としての佛教とマルクス主義ということになるのですが、マルキシズムは宗教であるということを余りに屢々いわれるのでありますが、併しマルキシズム自身の宗教の定義は最前もいったように宗教は彼岸主義にある、で斯様なものはマルキシズムは持って居ない、先刻川合さんの仰っしゃったマルクスの弁証法という物質の運動という概念はミステックである、逆にいうならば、論証されて居ない・・・・・・・・。

**古野** マルキシズムが宗教であるかというようなことは面白い問題ですが、今の問題にはなっていない。

**服部** ・・・・・・・・ということですが、是は科学に於て論証されて居るのでありまして、物質の運動の何物かに付ては目下の自然科学が回答して居ます、何れに致しましても、此問題は一応切上げますが、兎に角宗教としての佛教とマルキシズムの問題に付てマルキシズムは佛教に於ける宗教的なものと絶対に相容れない飽く迄それを否定する、換言しますと、哲学的にはマルキシズムに於ける唯物論が佛教に於ける観念論と徹底的に相容れないということになります。それから政治的にいうならば、教団としての佛教、所謂宗教現象に対してプロレタリアートは飽く迄も闘

うということになります。是は如何なる時代に於ても、従って今日の資本主義社会に於ても資本主義なる政治権力が宗教、従って日本では佛教と密接にくっ附いて居るからです——。

**木村** それは第三段の問題だ。第三は第三にやっては如何です。

**服部** 触れたまでです・・・・・・政治的には矢張り教団に対して対立する、しからば今度は進んで佛教についてどういう風にマルキシズムは其内容を——形式を打破して内容を活かすか、それは此人間の認識の発展過程に於ける非常に輝かしい一つの産物として、詳しくいうならば、弁証的な思惟を始めて人類史上に確立し、しかも希臘哲学よりも非常に発展した形式に纏めたもの、そういう意味で佛教に於ける弁証的認識の方法というものが、マルキシズムの哲学史的研究の上に於て特記さるべきものと思います。

**木村** ヘーゲルはどうなります。

**服部** ヘーゲルよりも或意味に於ては偉大であるとさえ云えませんが、そういう風にして畢竟ずるに哲学史的な研究の上ではマルキストは佛教に対して非常な熱意を有つものです。(笑声) 而して現象としての佛教、宗教としての佛教に対しては闘うということになります、それで最後に一寸つけ加えて置きますが、最前宇野先生、それから僕それから村山君の間に意見の一致を見た点は、宗教の本質、ダス・レリギーエーゼを超自然的なものの承認に置く点にありましたが、併しそんなら宇野さん達と僕達と何処が違うか、今のような一致の上に於て何処が違うかと云うと、今日の宗教学の方では其超自然的なものの認識は人間性に於ける永遠の範疇と考えられている、詰り人間の信仰、人間の利益等が永遠の範疇と認められる、所が之に対して我々は、それは歴史的な範疇に過ぎないと認めるものです。観念論の立場からすると、宗教的信念というもの、超自然に対する要求というものは我々の心の中にあるし、又これ迄の人類の心の中にあったから、だから永遠のものとして訳なくその存在が証明されたかに見えます、所が唯物論の立場からいうと、心なるものは一切物の反映と見るのですから、超自然に対する要求等等も、その被写物、鏡に写る実体を有たなければならず、かかる実体は社会組織の中に人間が自然及び社会を支配せず、逆に自然及び社会に依って支配されるようなマルクスのいう人間の前史的な段階の社会に其根拠があると見ますから、従ってそういう段階の社会が揚棄される場合に、——即ち人間が自然界を十分に支配した力を以って社会自体を支配するような時代に於ては、宗教的要求等の実体もなくなり、心理上の存在形態も消えて仕舞う、斯う云うことになるのです。

**木村** 併し其証明は成り立たない訳ですね・・・・・・。

**服部** 証明は露西亜から・・・・・・(笑声)

**矢吹** 反証も大分あるよ。

**木村** 其点で長谷川先生の意見を承りたい。

### 今日の歴史過程に於けるマルキシズム的理解

**長谷川** 今の両方の話を公平に伺って見ると、何だか妥協しそうで・・・・・・(笑声) どうも些とおかしい、服部君も宗教家出であり、本荘君も大分宗教哲学的である、村山君も今御話の通り宗教家であった、(笑声) 私はマルキシズムに対してはマルクス自身が何を言った、エンゲルスが何を言ったということとは別に今日の歴史過程に於けるマルキシズム的理解というものがあると思いますから、そうしてそれが今日のマルキシズムであると思うのでありますから、今服部君

のいわれた歴史的なものということは、マルキシズムの本質と思います、唯今は宗教というものを御話して居られるということですが、その宗教の御話を伺っているとそれは全く哲学のようです、私に言わせると宗教というものは論理的思弁を超越していなければならないもので、そういう宗教的なものに、兎に角も論理的の思弁を加えたものは最早私には宗教だとは受取れません、今迄御話されたのは次の時間の部分として御話のあるべきものだと思います。だがそういう風にいつて来ますと、宗教というものの自分の解釈を言わねばならぬ事になって長くなりますからただ一言これだけを言いますが、兎に角宗教は思弁的なものでない、然らば何であるかと云うと、ここではそれを私は思弁に対立するもの即ち行動的なものであると置いて置きます。宗教というものが行動的なものであると私のいうのは詰り歴史の一定の時期に於て人間は、直覚というか、衝動というか、傾向というか、何であるか科学的にはまだ判然しないがとにかく、斯の如く行動せざるべからずと云う状態に置かれるその行動の傾向はいろいろの意識形態をとり、それは法律とか道徳とか宗教とかいう制度の形で現われるが、その法律も道徳も宗教も本来決してその哲学に於てそれらのものであるのではなく、目指す所は行動です。マルキシズムも一種の宗教ではないかと云うようなことをよく聞かされるが、目標を行動に置く点で、宗教ということも云えるかも知れない。けれども宗教というのは、行動の示唆ではあるが、特にそれは宗教という制度の形態をとったものでなければならない。而かも私は本質的の宗教というものだけでは決して制度としての宗教をなさないと考える。宗教となるには制度としての形式を必ず持つていなければならない。歴史過程に於て問題となる宗教というのは、この制度としての宗教なのです。マルキシズムが今日に於て問題とする宗教というのもその意味です。所で制度としての宗教は一定の信条によって、それが行動の衝動として現われて来なければならぬ。そこに宗教の本来の関心がある。ドグマを求め信条を有つのでありますが、それは決して哲学的思弁の世界を求める為ではなく、行動の世界を求めるのです。そうしますと、宗教に信仰を有つということは決して「哲学をもつ」ということではありません。唯今の御話は佛教信者の御話しではなく、佛教論理学者の御話しで、つまり宗教を語っているのではなく、哲学を語っているではありませんか。宗教は元来行動的なものでありますから、其論理もつまるところ、一定の宗教をもつものはどんな社会的行動をとるかという所から発生したものでありまして、要するに、行動傾向はその前提として決定されているのです。論理はそれに着せた衣装で、本質的なものは行動です。しかもそれは社会的に、寧ろ階級的に定って居る以上は、その論理を他の論理でぶち壊すということは到底出来ない。即ちそれと反対の行動傾向をもつものが、それを行動に於てぶち壊せば、その論理も壊れるのです、苟も宗教が一定の行動傾向を持って居るならば、その行動傾向の現歴史過程に於ける地位を批判することは出来るが、そういう行動傾向をもつところの階級を倒さない以上はその宗教も倒れない。一つの神秘をもって他の神秘を倒し、一つの論理をもって他の論理を倒そうとするのは、宗教内部の争いで、何方が勝っても敗けても決して宗教は無くならない。それによって宗教否定の行動傾向を打ち破ることの出来ないのも同様です。マルキシズムは宗教を否定するが、それはマルキシズムの論理主義の必然から来たことではなく、マルキシズム的実践の必然から出たことなのです。それは制度として今日現にある宗教を否定するのであって、古代の宗教、印度の古代宗教、古代の基督教というものを相手にするのではない。日本でいうならば、マルキシズムが実践に於て否定するというのは、日本に現在ある所の宗教制度の結局の行動目的を否定するので、そ

れを否定すれば、宗教の哲学などは消えてなくなる。即ちそれは制度として存在する現実の宗教、ここで第三の問題として揚げられているもので、それが一番の問題で、それが最初の問題であり、最後の問題である、宗教としての佛教というのはそれだけのことです。只今のは哲学としての佛教のようだったので、私はそういうものは問題にしない。

木村 フォーエルバツハの哲学を承継いで居るでしょう。

長谷川 今日のマルキシズムの宗教否定は今日の歴史の段階に於ける宗教制度の否定であって、フォーエルバツハの唯物主義の継承ではない、フォーエルバツハなんか生存して居りません

木村 フォーエルバツハから理論は出て居るでしょう。

長谷川 マルクストはいかにマルクスがフォーエルバツハの哲学を克服したかを高調しているが、此处での問題はマルクスがフォーエルバツハを承けついでたこととは関係はないのです。フォーエルバツハの理論に依って宗教を破ろうと云うのではなく、マルキシズムの實踐に於て破ろうというのである、露西亜でやって居るのも宗教的行動傾向との戦いです。僕のもそうなんです。實踐に於て哲学を破る

木村 フォーエウバウハから出た哲学系統である以上は・・・・・・・・

長谷川 私のは實踐に於いて哲学を破るというのですがマルキシズムでは哲学的思弁の証明だけでは即ち論理の発展という論理主義による証明は意味を為さぬ、實踐に於ける証明があるのみと云って居る、だから第三の問題に就て喋るより外ないから今まで申し上げなかった。(笑声)

木村 マルクス主義の理論闘争と言うとは何うなりますか。

長谷川 如何なる社会的行動を執るべきかというための理論闘争です。いかなる理論も結局は實踐に於て証明されることによって成立する。どんな理論が實踐に於て証明されるかを決しようという為めの理論闘争・・・・・・・・

古野 甚だ話が混入って来ましたが・・・

長谷川 進行問題ですが、マルキシストの内部における論争というものをここへ持ち出したら紛糾する、是位の所で第三の問題に移ったらどうです。

矢吹 第三の問題を先に出したらどうですか。

本莊 今の長谷川先生のご意見ですが、マルキシズムの制度組織、社会的存在、政治的意義という観点から宗教をやっているようでありまして、長谷川先生の言われることはマルクス主義の宗教に対する角度というものから離れて居る様に思いますが。

木村 それはそうですね。

矢吹 どうもピントが合わない。

木村 それは彼等の實際の表看板でせうが、但しマルクス主義者は、唯物史觀的立脚地から宗教の根底を哲学的に破壊せんとしている以上、そこの話に触れねば議論が成立せぬと思う。

長谷川 唯物史觀は特定の宗教の哲学的組織などは相手にしません。宗教制度そのものが相手です。論理主義の争いはこの場合閑議論です。論理を玩んでいるマルキシスト程陰呑なものはない。

宇野 服部君等は陰呑じゃないか。

服部 長谷川さんに答えますが・・・・・・・・

古野 宗教としての佛教というようなことは佛教側も、それから左翼側も殆ど反対の気持ちの上



では或は多少とも共通的のところもあるかも知れませんが、今までの論理の過程から見ると殆ど相容れない、で時間も経ちますから一度終わったことにしまして、長谷川先生の提議みたいに第三に移るか、それとも第二に進むかということを御諮りします。

宇野 第一第二と残りのものをやってしまっ、それから第三に移ったらどうです。

古野 ではそういうことにします。

服部 論理的に論理の上に勝つから実践の上に勝てるのであります。

長谷川 あべこべだ。

服部 ですから長谷川先生の先刻の註釈は非常にマルキシズムの立場からは間違っている。例えばマルキシズムの前衛理論の分裂は其最も洗練された、最も尖鋭化した理論で以って敵を倒すための必要に尽くのです。そういう意味ではフォイエルバッハをマルクスが批判したように、現代のマルキストもフォイエルバッハ以後を論理的に批判しなければなりません。論理的に批判し得るからこそ、実践的の制度としての佛教に対して戦い得るのですから、やはり其前提を取り去らなければ佛教学者の方も困られましようが、こっちでも困ると思います。

### マルキシズム批判の中心は佛教の「拝む」点だ

村山 マルキシズムに於ては実践が非常に重大な問題となっています。実践のないところに理論の生まれてくる筈はありません。しかし、こうして今日のように佛教を理論的に哲学的に克服しようという試みは我々の闘争の実践の間からも生まれてきた必要性に強要されて、其為に問題にしたんだと思う。長谷川さんのいうように、理論だけを弄ぶという意味ではないと思います。で、哲学としての佛教も亦問題にしなければならない立場にいるのだらうと思うのです。

木村 そういう立場から佛教はどうしても潰されなければならないものですか、この点をハッキリ伺いたい。

長谷川 (矢吹氏に)伺いますが、先程までいわれたのはあれは哲学じゃないのですか、前の時期に述べられたことは——。

矢吹 それは哲学の部分もあるし、哲学でない部分もある……………。

木村 議論の進行に就てですが与えられた問題は三つです。第一は宗教としての佛教とマルクス主義、第二は佛教哲学とマルクス主義、第三は現実問題に関する佛教の立場とマルクスの立場とです。どうも議論は混がらがって来ましたが、哲学的立脚地からすれば、少なくとも形式上、佛教の見方とマルクス主義の見方と一致する所もあるから其点で本荘さんのいわれるように、日本のプロレタリアが、それを提げて、西洋の文化に貢献するということにもなる、佛教は単なる哲学ではない。宗教として立って居るのであるからそこは哲学説と多少区別をつけなければならない。かくて此立場よりしてマルキストは佛教の存在を認容するしかないか、或は半分否定するかという問題を第一に決して、最後に第三として与えられた現実問題に対する両方の態度を明らかにするという——之が議論の進め方になっていることを忘れぬようにしたいと思います。之に対して……………。

矢吹 先程から話が充分、哲学も出れば、教団としての話も出れば、色々前後して居ります 私 は斯ういうことになるのじゃないかと思うのです。形式をいうと、ホツプスか誰かがいったように、仮にたった一人の人間が生まれて、それを知らずにもう一人の人が生まれて、此二人が途中

で会ったらどうするか、此際考えられることは、抱き合うか、素通りしてしまうか、殴り合うか。私は佛教とマルキシズムの間もそういうことがあるのではないかと思う。で佛教に於ては拝むということがある。この拝む所がマルキストの批評をなすべき所だろうと思う。中心点はそこにあるだろうと思う。

## 佛教とマルクス主義（6）

村山 それはそうであろうと思います。——今まで僕達の云っていたことは、宗教という言葉の、定義づけみたいなのですね。問題はまだ一つも解決されていないと思うのです。で先刻も言った通り、ニルヴァーナにあこがれるというようなのと、拝むというのと、そういう点を二つに分けられましたが、其何れをもマルクス主義者は否定する。哲学としてのそれも、宗教としてのそれも否定しなければならぬ。本荘さんの言われたことは、吾々は、吾々の弁証法と形式上似たものであるという意味で認めたのであって其他に於てはマルクス主義者は全然否定する。ダス・レリギーエーゼを持っている、そういう狭い佛教を何故吾々が否定するかというと、まず佛教をマルクス主義のような科学的世界観と並置し得るものと仮定するならば、マルクス主義者の立場は非常に簡単です。出来るだけ、凡ゆる物事を理性的に説明し得る。其立場を吾々は執る。若し佛教が社会機構なり政治機構なりの欠陥を説明することが出来るならば——プロレタリアは何故斯くも苦しまなければならないか、ブルジョアは其上に立って勝手な真似をして何故宜いのか、何故に斯くも屢々戦争が起らなければならないか、佛教が十分に之を説明することが出来るならば、吾々は或はマルクス主義を捨てて佛教に走るかも知れません。併しながら佛教は全然それを説明することも出来ないし、又説明しようとしない。逃避してしまう。是は佛教のみならず総ての宗教家に共通する立場なんです、そうすると、より科学的に、より理性的に吾々に分るように説明して呉れるマルクス主義を当然執らなければならない。まずそういうような極く簡単な立場から宗教としての佛教を否定します 又吾々は其佛教を、唯物弁証法的に簡単に説明することが出来るのです。吾々は佛教の殺生の道程を考えて、印度であるからこそああいうような宗教が起った基督教とてもそういうように考えますが、そういう風に唯物的に発生的に考えるということがマルクス主義のマルクス主義たる所であって、是はちつとも原始的な考え方ではないのです。マルクス主義の考え方、特長は、或一つの場面を歴史的な一つの進行を切り取って、固定的なもの、永遠的なものとして考えないで、「流れ」として見る。それを現実の社会の狀態に結び付けて科学的に説明するという所にマルクス主義の最も大きな特長があるのです。佛教が何故に発生しなければならなかったか、何故に現在そういうようなものとして存在しなければならないかと云うようなことも一々説明しても宜いのですが、長くなりましょうから止めますが、そういう風に考えるならば、佛教が或一つの民族の中に、或時期に於て何故広まり得たか、何故日本の中で広まって居るかということが全部簡単に説明がつかます。そうなると、何の有難味もなくなってしまつて、何故そういうものが起ったかと云うことは一つ残らず分ってしまう。従つてより理性的、より科学的な立場を執るということで問題は簡単に片付くと思うのであります。

## 佛教とマルクス主義（七）

### 旧社会制度の変革と共に宗教制度は批判される

#### ——併し宗教は永遠に要求される——

矢吹 マルキストの間ではそうでしょうが、外の者はそれと違った見方をするから仕方がない。

村山 それを發生に遍って説明しなくちゃならないということになります。

矢吹 それは教団の話であります。第三段のお話であります。

本荘 宗教の立場に立つと、何も彼も皆宗教の中に包まれるようになって居るですね。だから宗教の立場に立つか否か、其立場を執るかどうかを問題とすべきで……。ですから今日の日本に、佛教は其發展の余地ありや否やということ、問題はそこに限定されたんです。

古野 一番と二番はそれ位に致しまして、一寸今休みましてお茶を差し上げたいと思います。

木村 只今村山さんの御説でマルキストが佛教に対する根本的の態度が分った次第であります。佛教徒の方から言いますれば、又哲学問題になるかも知れませんが、兎も角、吾等の宗教的要求なるものはマルキストはこれを如何様に——物の反映であるとかいう風に言われるとしても、何らかの形に於て、言わば先天的に宗教的要求のあるということは信じて疑わざる所であります。是は如何なるマルキストにも、少しく社会運動、政治運動が平和の状態になったならば必ず起つて来ることと思います。社会の革明又は根本的改良に際しては——フランス革明の際の如き、我が維新に際しての如き——必ず旧制度の破壊と同時に宗教制度の破壊に、一時運動が向けられるのですけれども少し世の中が落ち付くと直ぐに宗教的要求が快復して来る歴史的事実に徴してもこの事は推定されると思う。之は即ち、一時人心が思いあがって凡ゆる物を科学的に又は理性的に説明し尽し得ると連信した所で、実は説明し尽されざる所の人生の本質が必ず残っていて、而もそれは宗教的方法以外には何らの体験の世界にとり入れることの出来ないことに目ざめる結果に外ならない。マルキストは宗教家は宗教の世界をのみ見て居ると言われるが吾等からすれば、マルキストは総てを余りに經濟の立場からのみ見て居る。其立場からして、殊に實際問題として社会革明の場合に於て邪魔になるのは教会であるという所から、根本に遡って宗教の批判をして教会破壊の根拠付けとして宗教は阿片であるというような説明を下すようになったものである。之に対しては私も——實際運動の方便として——多少諒とする所もありますけれども、併しそれ故に之に依って宗教の本質其ものが根本的に否定されたものと思うならば、それはマルキストの誇大妄想に外ならないと思う。況してマルキストさえ認めて真とする或物を含む佛教を——心を基として神を基とせざる佛教を——理論の立場より根本的に否定するが如きは不可能事である。若しマルキストが飽くまで、それで押し通すというならば、どうしても吾等はマルキシズムのよいところを認めながらも之と妥協する訳に行かない。佛教家の中にもマルキストに妥協しようという人がありますが、第三回の社会問題に於て大いに吾々はマルキストに教えられる所もありますけれども、根本問題になると、どうしても妥協は出来ないと思うのであります。であるから、

經濟改革の理論としてのマルキシズムは宗教批判を放棄せよ

自然斯うなつて参りますと、マルキストの諸君がもう一つ反省して吾々の方に敬意を表し、独立の立場を価値的に認めるか或は吾等は佛教を捨ててあなた方の門に降るかということにならざるを得ないと思うのであります。私自身と致しましては、こんなことを言うあなた方からは笑われるかも知れませんが、マルキストは謙遜に経済問題、経済の改革ということにその仕事を限って宗教のことには触れないで、之は吾々に任じて妥協して下さいと結構だと思う。日本のマルキストはそこに露国にない独自の意義を発揮し得る道を開くのではないかと思います、如何なものでありましょうか。

## 佛教とマルクス主義（８）

### 宗教批判は宗教の発生する社会の批判である

長谷川 宗教のことは宗教家に任せて、マルキストは経済のこのみをやれというお話でしたが、だから私共は宗教の哲学に触れないで、宗教を発生させた基礎を破壊しようというのであります。宗教論を宗教論に依って打ち壊すというのは、或宗教に対して他の宗教が起った時にやる仕事でありまして、マルキシズムは——マルキシズムと言っても、私のマルキシズムになるのだが、服部君と違ふかも知れませんが、——宗教を相手にするのではないのでありまして宗教が発生した社会組織を相手にするのでありますが、宗教を発生させるような社会組織を相手にする場合にも、そこに発生した宗教というものが、社会の現在の歴史過程に於て障碍でなかったら決して打ち壊されないでしょう。又打ち壊さなくても宜いのです。例えば古代の話になるが、原始共産社会に於て、原始共産制を支持するような宗教であつたならばそれは打ち壊されず又打ち壊さなくて宜い。原始共産制を維持する——共産制の科学というものはなかったから、共産制の宗教というものがあつたが、是は打ち壊さうというものがなかった。然し、その共産制が崩壊過程に入ると恐らく、共産制の宗教制度は打ち壊されるでしょう。尤も実践的効果のない共産制的觀念のようなものは残るかも知れないが、それと同じように今日の社会過程に於て必然の進化の起つた場合に、その行動傾向を支持する宗教であれば、所謂宗教の迷信的意識というものは勿論今日の科学的意識によって取って代られなければならないが、然しその宗教的行動傾向が障碍をなさぬ限り、其行動は抛って置いてよいのです。もしその行動が革命的意識によるそれに一致するならば、其宗教的意識は、自然科学に依つて打ち壊されてもその行動は、現在の進化過程に適應することによって成立し得るのです。だから其迷信的意識というものも障碍になるまでは強ち取り急いで打ち壊すという必要もないようなものです。然し今日の宗教は崩壊しつつある社会組織に於て、その成立し得ない組織を支持することによって進化の障碍となっている。だから宗教のことは宗教家に任せるといふわけには行かない。経済の改革をやれば屹度宗教を打ち壊すことになるのです。たとえば封建時代の武士階級が、封建制度を打ち壊しようとした市民階級に向かつて、君等は資本主義国家を作ればいいのだから、経済上の改革だけやって、武士階級のことなどは抛って置いたらいいじゃないかというようなもので、それは決してそんなわけには行かない。封建制度がなくなれば武士も徹底的にやられなくちゃならない。今日宗教というものが本質的に宗教的

なるものというようなものがあると思うからいけない。宗教というものも、畢竟は、或一定の社会組織に於て生活する人は其自分の生活する社会の根拠を維持する態度をとるというだけのことなのです。だから其社会組織が崩壊過程に入つて、社会が新しい組織をとるべき過程を進んでいるならば、その新しい組織を建設する運命をもつ社会層は、必然に旧社会組織を崩壊せしむる運動即ち行動傾向をとるに定つていたので、昔ならそこに新たな宗教的信仰が産まれる所だろうが、今日では科学的意識の新たな建設となつて、それが実践的に構成されれば宗教意識というものは自ら滅びる。つまり社会科学の時代には宗教的意識や制度は、科学で肯定されない組織なり階級なりを支持する機能をもつものとなるのです。そういう意味からは宗教は抛つて置いても宜いのですが、——其社会組織さえ潰れれば——。所が現在の歴史の過程に於て、新たな社会を構成すべき今日のプロレタリアというものの観念的意識的態度は必ずしもこの歴史過程を反映したものとはいえない。というのは、教化というものは特にプロレタリアに対しては非常に遅れているのであります。即ちブルジョワの教化が行き届いていれば、いほど、又宗教心が深ければ深いほど、プロレタリアの観念の涵養は遅れる。従つてその遅れた観念がプロレタリアの行動の障碍となる。よく聞くことだが、マルキシズムでは改革は歴史的必然だというのが、それならば、何も意識的行動を執るには当らぬじゃないか、特に進化過程を促進するという行動を執らなくても宜いじゃないかということを言いますが、人間社会の進化過程でありますから、意識に依つて行動を掣肘するということも無論ある。全体の歴史としては必然の過程を歩みますけれども、それは多くの社会的集團の闘争の過程であるから、それぞれ行動傾向に応じた意識を構成する働きをもち、それによつて進化を促進したりそれを阻んだりする。或一定の度合いまでは理論に依つて行動が促進され又阻まれる。服部君は論理的に成立すればこそ実践的に成立するのだといわれたが、そのあべこべが真実です、然し実践に必然な論理的態度が成立することは人間の行動の特徴でそれによつて行動的効果は甚しく増減します。無論抛つて置いてもプロレタリアは一定の概念形態をもつべきものに違ひないのであるが、他の階級の道德又は宗教等の教化に依つて其プロレタリアは、自分の生活根拠と反対の意識を持つ危険があります。ですから宗教家が其教化を全然廢めて、寺院を廢めてしまつて、何も言わず何もせず引込んで居つて呉ればこちらもちも抛つて置きます。苟くも宗教家がプロレタリアを、その生活根拠と反対の意識観念を持つように誘惑しようとするならば、それは抛つて置く訳には行かないのであります。

古野 一寸……今木村先生のように、マルキシズムが宗教、殊に佛教の陣野に帰するかどうか、又長谷川さんの仰るようにマルキシズムが、宗教の發生する根底を侵し得るかどうかそういうことは依然として謎だらうと思います。それで事実上に於て、第一第二の宗教及哲学として見た佛教という問題は、凡そ論議し尽されたものだと思いますから、少し休んで戴いて、最後に、最も今日の尖鋭化したる所の議論闘争である所の、教団として見たる佛教ということに就て討議して戴いたら宜いかならうと思います。時間も丁度其方が宜いように思います。其間はまあ座談の、非常に微温的なものをおやり下さると云うことにして……。

#### 教団としての佛教——教団批判の歴史と宗教の本質——

古野 唯今から最後の教団としての佛教という愈々尖鋭化したる理論闘争に移ります、唯今社会学者たる綿貫先生が御見えになったのですが、綿貫先生の立場は何れでありますか、私は不幸に

して能く存じませんが、右翼になって居るように思いますから、右翼に願いましたが、——それでは始めて戴きたくございます。

**矢吹** それでは問題が変わりましたから、皮切りに一つどうも此話も亦先刻と同じようにこんがらがりそうに思われますが、私は皮切りとして意見を出したいが、どうも発生論の問題も出て来るに違いないが、まず教団論、即ち宗教として佛教が社会的に一つの組織を作り出す方面、社会的現象としての広い意味での社会組織に対し、現在の社会組織中の一構成成分として存在する方面に向かつてはマルキストは当然その根本から攻撃を加えなければならないものがあるに相違ない。発生論の問題ではマルクスは宗教学が漸く生まれた頃、マルクスは千八百十八年に生まれ、千八百八十三年に死んだのでありまして、マルクスは其頃の古い型を取って来たものであります。宗教の発生論に就いてはここ七十年ばかりの間に種々な流行説あった内で、古い流行の起源説をマルクスはその儘に採ったが、その後色々変わって来ている。だから私は発生論に就いては根本的に違った意見を有って居るのであります。しかし私は発生論の皮切りは致しません。教団論に付きまして申し上げます。先ず佛教の寺院組織の中その数からすると全国に於て七萬六百の御寺があり、境外佛堂と併せて十一萬何千、神社と略々匹敵した数を持って居るのであります。日本に於る宗教的建設物からしますと神道各派所属の教会が一萬、それに基督教を併せますと、約二十五萬の建設物を持って居る。今これを一括して宗教団体を一つとして考えます時には、何物も之に匹敵するだけの財団は持って居らぬと思う、神社は別であります。佛教だけは曾て政府の援助を借りて今日迄維持されたものではないのであります。御一新当時には神佛判然の命を出して甚だしき排仏毀釈をやった。其後何らの保護を加えられないばかりでなく、神佛判然で寺の特権を奪い去られ、明治二十年は国粹保存論が出ましても三十年に日本主義が出ましても佛教を攻撃しましたから、佛教は教団としては明治初期以来、学者と謂わず官憲と謂わず、佛教を攻撃し厭迫したから、この点では佛教攻撃は珍しいことではないのであります。それにも拘らず尚且十一萬の寺と堂という大きな財団を持って居るといふことは何であろうか、私は茲に社会的に考えるに、マルクス流の社会観から見ますと、そこに敵がある、斯う御考えになるでございましょう、成る程今の教団組織が封建の遺制を持って居る、僧正の階級から致しまして、本山の組織から致しまして社会が普通選挙の行われて居る此時代に佛教のみが茲に尚依然として嘗の形式を保って居る。併しこれはローマカトリック教が欧羅巴に於て幾らマルキストが攻撃しましても、欧羅巴に於て昔の遺制を保って居ると同じ事実であります。私自らはその儘で宜いとは考えて居りませんが、現実の社会の社会力として考える場合にはどうであろうかと思われるのであります。その反面には矢張り人間性の根本に触れた要素があるからではないのでしょうか。この大きな力が果たして今のマルキストの攻撃に依って潰れるだろうか、今日の文明の力は中央の大都会さえ一つ変革して仕舞えば、全国は一遍に変革されるような組織になっている。しかし是はどうも余りに大きな力であります。

#### 社会改革の期と——其の後の佛教——

そこで長谷川さんも先程言われた崩壊さるべき社会過程と云うものは何時頃になるか、茲五百年も六百年も先ならば、どうも長過ぎはしないか、現代の私共の生活と云うものをマルクスが言っている現実の生活と云う点から見ますと、そんな五百年や千年の先の話を今更茲で実現されるの

何のと言うには余りに遠いということにもなります。宗教が阿片であるなら、マルキシズムは赤痢菌だと或座談会の笑話に出た言葉、私が作ったものではありませんが、そんな風にも考えられる。扱私は教団の崩壊に付きましてマルキストが今申しましたような如何にして崩壊さるべき社会過程を早く片付けて佛教、宗教全体にしても同じでありましょうが、佛教の社会組織制度を壊し得るであろうかどうか、その時期の予想であります、そんなことは無理な御尋ねであります、それからそんなことをしましても、野蛮人でもニグロでも或は四十萬年前の石器時代の生活を今だに続けて居る亜米利加のインディアンにまでも、此世界の富をマルキストのいう通り共産的に均分されるか、一体富がそれだけあるのかどうか。それはどんな経済学者でも答えられない。そこへ行くと矢張りマルクス説も一種の空想論だと伝えられるのであります。結局、斯んな風になるじゃないかと思ひます、教団の攻撃に至っては如何に之を早く崩壊に導くかと言う方法論に付きましては、斯ういう席では一寸伺ひにくい話もあろうし、それは無理かも知じませんけれども、仮にマルキシズムの社会が茲二十一世紀頃には凡そそれに近いものが、露西亜が既にやって居るから、露西亜以外の土地でも実現されたと仮定した所で、其時に佛教徒はどんな立場になるであろうかということを考えて見ようと思う。それは今晚教団攻撃論は幾ら攻撃なさってもそれは半ば以上御尤もだろう いまだに教団としての佛教はその理想を実現し得ないでおるがマルキシズムはこれからのことを言うから現在に現れた欠陥を指摘するには大変都合が可いが、仮りに実現された時佛教はどうなるであろうか。私は斯う考えるのであります。是が要点であります、佛教もマルキシズムから申しますれば、謂う迄もなく幻想的な空想的な社会観を有つて居るものであります。マルクスも矢張り同様に空想的な考を多分に含んで居るものであります。暫くそれは別としてこれから述べるように、斯ういう風に項目を分けると、或は佛教内部の方から戦線の不統一が出るかも知れませんが、

### 佛教に含まれた経済観

私は話を簡単にするために佛教の中にはマルクスが言ったような共産主義の考もあるし、余程似た経済観をも持つて居ると思うのであります。それは私は三階教等の研究を此席で述べようとは思ひませんが、徹底して居る考を持つて居る、マルクス以上の考すら佛教の中にあるように考えられます。凡そ一派に止らず佛教全体を通じて寺というものは四人以上共に住するにあらざれば寺と名付けず、日本の今の寺には一個所も斯ういう所はないが招提寺という寺の名でもわかる通り、四方から来た客を誰も拒まない、即ち共同の生活をする場所であつた。招提が一般に寺の代りに使われたこともある。斯ういうものが昔から実行されて来た、今は実行されて居ないが、是は昔の話といへばそれ迄であります、次の時代にマルクス流の社会が実現された場合には佛教徒がどうなるのかということを考える場合には矢張り昔の歴史を述べなければならぬが、同じ共住共産の生活でも佛教は理想主義の上に立ったものであつて、決して科学主義の上に立ったものではない。佛教とマルクス主義とは一方に理想主義、他方は科学主義だという点が第一に両者の差異を語つて居ると思うのであります。第二に佛教とエーゼンザイト、彼岸主義の項目であるが、先程の宗教性の問題に就いても、マルクスは西洋に行われた宗教を見た。西洋哲学上の主要問題……今日どんな西洋人でも宗教の信者が頭に焼付いて離れない三つの理想がある。それは神の存在と、靈魂不滅と意志の自由である。然るに佛教では意志の自由も靈魂不滅も教学上

の主要な問題にしていない。西洋人が逆立ちになって騒いで居る問題を佛教ではその通りに騒いで居ない。しかし彼岸という語が佛教から出たように佛教も彼岸主義である。そういうことで分かりますように、マルクス派の人々が宗教を考える時に、どうも基督教の頭が濃厚に這入って居るためにすべての宗教を彼岸で見ている傾向があるのではあるまいか。即ち佛教は他の宗教と違った彼岸主義である。勿論、佛教の思想の中でも色々ありますが佛教にも多分に未来主義がある。この世で苦しむ代りに彼世で楽をしようという考えが通俗的に一般的に行われている。要するに佛教は現在未来という思想の上に立って居るが、マルクスは現在だけで以て、墓を越えた向う先は考えていない、茲が第二の違いだろうと思います。第三には物を主とするか心を主とするかの項目であります、唯物史説の上に所謂社会制度に対して佛教のは先程木村君が言われた意味でも宜しいが、片寄ったものだけでない、物だけに片寄ったものでない、そこがマルクスは唯物だけに片寄って居る。物を主とするか心を主とするかという点での相違、これが第三の違いであると思います。それから第四項ですが佛教には理想主義の上に立った共産の思想がある。その昔、佛教ではマルクスの思ったことを却って実行し掛ったことがある。しかしそれは義務として自分の物を人にやると教えられたのであって、マルクスのように闘争に依って勝ち得ようとはしなかったのであります。でありますから、私は第四の違いとして佛教は義務主義の共産主義であるが、マルクスは権利主義の共産主義である、それが佛教と異なっている。佛教は決して権利として取ろうということは毛頭言っていない、其結果佛教では昔から宗教戦争というものがない。勿論宗教戦争がないのは慈悲と殺生を禁じたことによるが、これが他宗教と違う点で、日本で宗教戦争と云えば、真宗と日蓮宗が出た時の争い位のものがありまして、叡山や高野山やの喧嘩は坊主の喧嘩ではない、僧の装いをした、武士即ち僧兵の喧嘩で例外であります。本当の宗教戦争は真宗と日蓮宗位のものでありまして、印度を出て以来始めてであります、マルクスは何処迄も闘争でやろうというのが、この点で思想の基調が違っている。これは第五項になると思います。それから第六項に挙げられると思うことは佛教は直接生産に関係しない、消費の問題に関係して居る。マルクスは消費と生産と両方併せて考えて居る。是は色々議論がありましようが、率直に申すと斯う申して宜かろうと思う。結局外の言葉で括りますと云うと、佛教では根本に何の宗旨の考えでも、その根本の意識は我、我所、是は法律の言葉に直しますと、生命財産、この生命財産に執着するなということを根本に説くので、これは何の宗旨でも拒むことの出来ない、佛教の一種のイデオロギーかも知れませんが、又実行には部分的でありましてそれが根本教義であります。其我所という財産に対しましては佛教は無所有を理想として居るものであります。持たないということを理想として居るものであります。そこで此無所有を理想と致しましても、我々に慾があるから、その徹底した実現は出来ない。そこで今現実の世界が出来てきた訳であります。そこが佛教の不徹底な点だとマルキストが言われるが、それは確かに不徹底であって、經典に書いた通りに出来ないということが懺悔の生活になるのであります。しかし真だ善だということがわかってても実現はその幾分だけしか出来ないのが、どの主義主張でも同じことで、マルキシズムだとてそうだろうと思う。扱てマルキストの立場に立って其社会が実現された時に果してマルキストは思う通りに出来るかどうかどうか、佛教ではそういうような点で或一種の悟り迄行かないと総ての平等の考えが出来ないと云うことに決めて居るのであります。我々は悟り迄行かない、私有財産もあり、僅かばかりの月給も俺の月給だといって喜んで居る。是が現実の姿であります



が、十地以上の菩薩になったならば、確かにマルキストが考えていることを鬭争なしにやれることになっている。舍利弗に外道が御前の眼が綺麗だから呉れといった所が舍利弗は早速眼玉を取ってやった、所が貰って見ると余り綺麗でなかったのが怒ってそれを蹴飛ばしたという話がありますが、利他主義と無所有との或一種の悟りを伝えたものであります。マルクスは何処迄も人間の欲望というものを認めて、資本主義も勿論そうですが、其点は佛教と根本に違っている点でありましょうが どうしても自分の慾を認める、其上に今の経済学が成り立って居る。しかし佛教の観方考え方が違う。唯我々は現代意識に囚われて居るからそういう人はありません。しかし中にはそういうことをやって居る人もある。乞食の生活をやったり何かして居る人がある。欲望を主とするか無欲を理想とするかの相違、これが最後に第七項として挙げられるべき違いだろうと思うのであります。斯ういうように考えました時に今の現実の教団に対する攻撃は是は半ば以上必ずマルキストの言うことが私共も成るほどと思うことであろうと思うが、さりとてマルキストの理想が実現された時の社会、それは若し五百年千年先ならば、そんなことを考えるのは早いのであって、今日の議論でありませんが、若しマルキストの社会が実現された場合には佛教徒はどうなるか、佛教は矢張りマルキスト以上の立場を持って何か自分の主張を持って居るのではないか、又その社会にも行われるべきではないかということを考えて居るのであります。幸い此七項が何か議題のセンターになり得るならば、時間の省略上便宜もあるかと思ひまして、皮切りが甚だ長くなりましたが、要項を申上げた次第であります。

#### パンを得た後の問題と教団改革の社会民衆主義——

木村 現実に於る此マルキスト等の認めて居る分配の限界、ブルジョワとプロレタリアートはマルクスを採ると採らざるとに拘らず之を認めなければならない、之を佛教徒の立場から考へて貰いたい、之を佛教の教団を通してどう決めるか、佛教の教団があつてそれが社会的にどういう様に有用時に働くかということを今の教団は駄目としても働きというものを新しい佛教徒として言つて貰わなければならない

矢吹 それは私としても困る、今日でも実は佛教徒の側に居りまして、私は右の方を占めて居るが、我々はパンのみに依つて生きるものにあらず、我々はパンを食つた後にどうするかということを考えて居るのですから、それはマルキストには問題でない。しかし私共にはパンを食つて腹が膨らんだらどうするか、是が私共の関心の中心でありますから、そういう立場に立つて居ることを主として述べた次第であります。茲に日本現下の社会政策論をやっている邊はない しかし私は大正六年に第一回の外遊から日本に帰りまして、露西亜の革命の少し前の社会状態を見、伊太利や佛蘭西に於る寺院財産の侵攻、是は本で読んで日本に帰りました時、何れ日本の寺院其他のものがやがてはそれに似たような叫びを聞くのではないか。自分が本当にそう感じましたためにそれを叫びますと警視庁の危険人物ではありませんが、教会からどうも彼奴のいうことは怪しからん、斯ういうような批評を受けました所が果せるから後になりまして十何年か経ちますと、僕の予言が当たったのでは決してありません、是は当たり前、分かり切つたことでありますが、十三条宣言の中にも斯ういうものが現れて来たのであります。労働者が或御寺の前に行つて何したとかいうことが頻々として聞かされるようになりました。之をどうするか、私は社会政策の立場に立つて居るものでありまして、曾ては東京市の社会局等に柄にないことをやったものでありま

すから、日本現下の社会政策をどうするかということに就ては自分の意見がありますが、寺院の問題もそれに伴っているのです。全体私は左の極端と右の極端は不可ん、斯う考えて居るのであります。社会問題が極端に依って解決されるものではない、我々は極端な人間じゃないので、生きて居るという意味がよく分って生きて居る人は少ない。生きて居るから生きて居るのが現実で、其上に立って大衆を相手にして其人の福利を考える時に極端論ではいけない。社会政策には其間に幾つかの階段がある。極左の露西亜が新経済政策を採る迄にはケレンスキーの革命、それからレーニン、トロツキーの幅を利かした時代、それからトロツキーの勢力を失った後の時代、大分段階のあることを考える時に成程現実では露西亜でも矢張り書いてある通りに実行が出来るものでないという論証を示された気がする。そういう意味に考えました時社会政策に依ってやる。其社会政策は幾つかの階段がありますがその中日本に適当なものをやって行く、その社会政策の見地に立って今の寺院の改造をしなければならんもんだと私は信じて居るのであります。そんならどうする、是はどうも広汎な問題でありまして、真宗のように法王制度のような制度もあれば各宗派は皆俗界の政治の真似をして、議会制度の真似をして選挙制度の真似をしているが、理想主義教団の実が挙っていないこの点では佛教も教団としては頗る欠陥を有っている。それには教団自身の欠陥もあるが社会が如かあらしめた方面がある。それは当然変えらるべきものだろう。佛教の主義主張をもっと判然と教団と人ともに実現さるべきように改造さるべきものだろう。教団としての佛教攻撃はマルキストのみではなかったように、その教団の改造にも色々な主義主張によるものがある。兎に角、佛教には此複雑な教会組織が五十六派あります。其五十六派が皆違つて居るのでありますから、どんな社会政策に依って此寺院を整理して行くか、若くは日本の本当の社会政策的見地に立っての改造方法があるか、斯う言われると、是はどうも斯ういう席では簡単に言い尽すことは一寸困るのであります。今の制度ではいかん、是だけは確かであります。夫位の所で・・・・・・・・。(笑声)

## 佛教とマルクス主義 (9)

### 本質とは概念である

本莊 時間も大分過ぎて居りますから、私は唯今矢吹先生の仰った問題に対する自分の意見を簡単に述べたいと思います。箇条的に之をあっさり申し上げます。第一に矢吹先生の仰られたことは、何か人間が闘争をしたりすることは、意志とか理想とかいう力に依ってするというお考なんです、そうでなくて、——直接に表われる形はそうでも——現在動いている「事実」が、今日の社会組織の矛盾が、経済の制度の欠陥が、爾うさせているのです、飯の食い方の事実が闘争を導くのであります。闘争へ意識に依って進むのじゃなく、生きて居るという事実がそういう所へ行くのであると云うて宜いと思う。それから第二番目に、宗教はどうして無くなるかというお話であつたのでありますが、是は矢張り問題は、唯物論ではどうして安心が出来るかという問題になるのであると思うのです。そうすると、安心を求めるという要求は、どういう所から出発したかという問題を突き詰めるより仕方がない。一つは無常感、もう一つは罪惡感です。これは唯

々永遠とか完全とかいうものは観念だけであって、完全なものは一つもないから、どうか完全なものを求めたいという欲求から来る。これは間違っている、完全というのは概念であって、現実にある個々の事物は不完全である。ヴィナスの像は、人間の美は斯くありたいという願望ほしきものを掻き集めて作ったものです。ですからどの人間にもヴィナスの美人像のような人間はない。又無常感もそうであって、永遠というのは、あれは形容詞にダスという冠詞をつけたもの——まあこんなことを言いますと長くなりますから止めますが、何しろ安心の要素というものは無常感から来てます。完全なものはない、自分は将来は死ぬ——一切は暫有的であるというような考え方から無常感が来る。此世を無常と感じたり此罪惡をどうするかというような考えがどういう謬見から来たかという点をばつきつめれば宜い。それから第三番目に、信仰の方の側では「宗教は成程発生的にはマルクス主義のいう通りかも知れませんが、本質に於てはそんなものはない。時代々々に依って着る着物が変わって行くけれども本質はそんなものではない」という。成程是も尤もであるけれども、本質も、ダス・レリゲーゼなんと云うのも、実はそんなものは何処にもない。あれば見せて戴きたいものであります。宗教の本質というのはそれは概念であってホイルバツハが「本質とは概念である」と言った。「本質とは」と言って、棒を引いて「概念である」と言っている。非常に簡潔な言い方で含蓄がある。物の本質は発生的に考えることによって掴めるのです。マルクス主義者は現在だけを説くというが、佛教では過去現在未来という考え方を、超越することが佛教でありましょう。例えば、マルクスの言った弁証的唯物論を世界的な……。

### 宗教は個人の問題である

それから宗教の問題で、第一、エルフルトやゴークの綱領なんかでも、宗教問題は個人問題でありまして——個人問題と言った意義が、どういう意義であるかは此処では論じないことに致します。第五に、最後に、そんならば、教団というものを倒すならば、どういう風に佛教側はなるかと云うと、是は寺院として残るべきものでなく、即ち教化作用として存在するものでなく唯々クラシツクな物として、大学に残したら宜いでしょう。シェクスピアやゲーテの芸術のように残ったら宜いのじゃないかと思う。

### 佛教とマルクス主義 (10)

古野 教団としての佛教と云うのは、此問題の焦点でありますから論点を分起しないようにして戴きたいと思います。

#### 教団の腐敗を ◇……佛教者は如何にするか

服部 矢吹氏のお話は現在問題になって居る教団の問題を日本の現在の佛教が、教団として非常に腐敗して居ると云う事実于是就ては矢吹先生御自身も御認めになり、大部分マルクス主義者と意見が合致するということだけでおとぎしになって、そうして、先刻述べられた七つの項目というのは、謂わば是迄の時間に述べらるべき宗教の哲学上の問題を却って此処の場所でお述べて居るのでありますが、そういうような矢吹先生の立論に対して、今こちらで言われたように、

一々お答えするという必要かも知れませんが併し今迄の議論の進め方の上では時間もありませんし、又順序を逆戻りさせることになると思います。それよりは、何故佛教の立場から、抑々現在の教団の腐敗、或は現在教団としての佛教の批判をなすべき順序の時に其順序の劈頭を取って立たれた矢吹先生が肝心な問題をスーッと飛ばして、既に過ぎ去った問題を述べられなければならないか、それが問題と思うのであります。私はそれに対する結論としましては、現在の佛教の教団の腐敗と云うことに対する説明を、佛教の上からはどう云う風にされるか、出来ないから今のような立論が出るのであろうかと疑うのであります。マルキストの立場から申すならば現在の佛教の教団が何故腐敗して居るか、何故それが民衆の桎梏となって居るか、何故民衆を奴隷化することになって居るか、何故民衆を向上させることが出来ないか。之を要するに何故佛教は、何時までも資本主義的の奴隷状態に民衆を存在せしめて置かなければならぬ組織に低下したか、それに対してはマルキストは十分に説明することが出来ると思うのであります。それは決して此処に聴衆としてお集まりになって居るような理解ある方々に向かって説明できると云うようなことでなく、もっと卑近に、労働者や農民に向かってハッキリ分かるように説明出来るのであります。何故ならば労働者や農民は、現在の生活の体験の中に佛教の害悪、教団としての害悪腐敗性というものが判然と浸み込んで居るから、だから之を彼等にやさしい言葉で説明出来るのであります。寧ろ吾々は今晚の此席上では佛教の墮落、教団の墮落に対して佛教側の批判を聴きたい。それに対してマルキストの批判を加えたい。是は矢吹先生に提議するのであります。先生がカツ飛ばされた部分をもう少しやって戴きたい。七か条を挙げて仰ったことに対しては説明せよと仰るならば、司会者さえ許されるならば如何程でも説明致します。例えば理想主義と科学と云う問題にしましても

### マルクスは理想主義

を持たないのではない。マルキシズムは最大の理想主義である。それは実践の伴わない空想ではなく、マルキシズムに於ては所詮理想主義は、それを実現する為の社会的労力、又それを実現する為の物質的根源、その一切をこめて、打って一丸とした理想主義でありますから、其点に於ては如何なるものにも負けない、従って佛教にも負けない。それで、それに就て現実の問題に就て示して戴きたい。現実の問題とは現在の教団の腐敗という問題を論ずるという点で示して戴きたい。教団が農民、労働者の桎梏になって居る。それを打破すべきである。それを打破すべきであると云う叫び声の点では矢吹先生と吾々も同一であります。吾々の方ではそれを打破する為の方法論がある。社会的の勢力がある。又それを実現する為の客観的の勢力もある。佛教に於ては併しそれを何処に求められるか、之をカツ飛ばされないで、改めて佛教側から・・・・・・。

### 佛教とマルクス主義 (11)

#### 教団の腐敗の原因は現代社会の腐敗にある

矢吹 お尋ねに接しましたが佛教が腐敗して居る今の制度ではいけない。封建時代の残物を其儘持って居って、普通選挙にまでなった今日の日本に、佛教だけが、まだ封建時代の儘のような状

態である。是は事実である。けれどもこれは日本の社会が然らしめて居る、斯う私は考える。佛教が腐敗して居るばかりでなく社会が腐敗して居る。それは色々な方面を見れば直ぐ分かるのであります。坊さんばかりが腐敗して居るのではないので、社会も腐敗して居る。此意味に於てはマルキストは、今の社会の欠陥を指摘する点に於ては十分やって戴きたい。それは確かに指摘される通りの社会状態が、私共マルキストでない者にも明瞭に見えて居る。でありますから攻撃はドンドンされるのが宜いだろうと思う。だが何故其佛教がその理想通りに平等施一切を実行することが出来ないのであるか、思う通りのことが実行出来ないのであるか、斯ういう問題になる。しかしこれはマルキストも同様に被むるもので、マルキストは其原稿代等をマルキスト風に扱えそうなものでありますけれども、そういう人は、私寡聞にして未だ聞かない、それはたまにはありましょう。これは間違つて居るかも知じませんが、そういう意味から言うならば、佛教の坊さんが私欲に耽つたのとまあ似たもので、マルキストの合同、戦線の統一すら割合に実行の出来ないということは矢張り日本の社会が然らしめて居るのであって、そうなつて来ますと攻撃はどんなさるが宜しい、そして段々変つて行くのが宜しい、併しそれは社会政策的に行きたいものである。詰り直接行動でなく。そんなことでは駄目だ、斯ういう理論になつて来るだろうと思う、そこが最後の分かれ路になる。私等は矢張り社会政策的に、漸進的に改良されるもので、その方が可いと思う。そこでマルキストの方では、それはイデオロギーに捉われて居る奴が幾ら改良しようつたつて出来ない。斯ういうことになるのではないかと思う。それで最後になりはしないかと思う。

## 第二の世界戦と佛教

村山 実の所を言うと今論ぜられて居る問題は、吾々の立場から言うと、矢張り長谷川さんの言われたように一種の閑議論であつて、現在工場の中で、お昼を食べる時に、水でなく湯を呉れということで、其為に牢屋に這入つても構わんという位の闘いをして居る時に先の世の中で佛教徒がどうなるとか、佛教徒が腐敗して居るとか腐敗していないとかいうことは現在吾々にとっては問題でない。問題でありませんけれども、唯々聴衆諸君の興味の為に申上げるならば、先刻矢吹さんが言われましたが、何時〇〇が来るかという問題を取り上げて見るならば——此問題も吾々に取つては大した問題でない。是が百年先に来ようと、千年先に来ようと、吾々の前衛が千人三千人と〇〇〇〇法律を以て脅威されて居る、にも拘らず同士が戦つて居るという場合に當つて、〇〇〇〇が来るかというようなことは吾々に取つては大した問題でない。唯々理論を弄ぶ所の、理論を興味的に扱う人がそういうことを問題にするのであるが、併し吾々とても全然目当なしに戦つて居るのではない。次の世界大戦争が来た場合恐らく日本の××の第一歩が来るだろう。帝国主義戦争が、××戦争にまで、××にまで導かれるであらう。其為に全努力を傾けて居る。即ち第二の世界戦争が始まる時が決定的の瞬間であるということを申上げて置きます。次に××後に佛教はどうなると云うことでありますが、是は現在の露西亞に於る基督教徒の立場を御覧になると相当参考にならうと思う。元来斯ういう宗教は農民階級に多くの支持者を持つて居ります

農民階級というものは決定的な革命的階級ではありません。革命的な階級は労働者階級であります。日本でも既に労働者階級に於ては段々と佛教が——佛教に限らず総ての宗教が其勢力を失いつつある。農民階級の間に多く佛教は行われて居る。併しながら現在の露西亞に於ては其農民

すらも、マリアの像とか基督の像とかいうものを広場で焚いてしまつて、教会を穀物倉にするとか食べ物との交換所にするとかというような状態に来て居ります。で革命後に於ては相当矢張り長く革命前に於て佛教を支持して居った所の農民階級が、最後まで佛教的意識の支持者として残るであらうと思います。それから又、嘗て佛教が基督主義的の立場に立ったことがあるということですが、原始共產主義時代というものは嘗て到る所にあつたのでありまして、何も佛教に限ったことではない。現に原始基督教も、たった一人では以て順礼の旗に上る、何物も持たない、人の情に縋つて食べ物を恵んで貰うという立場であります。是は宗教総てに共通した理想であります。共產主義的理想というのは人間全部に通じた理想であつて、佛教がそれを持って居るから佛教は宜いなどという意味に一つもならないのであります。問題は現在の社会を如何に変革して行く力と理論を持って居るかという点に存在する。佛教には——佛教に限らず、総ての宗教に全然それがないということを私は断言するのであります。何故ないかといへば、それが若し政治運動を始めるならば、佛教は、佛教の本質と相反する。佛教は政治運動を行うことが出来ないものであります。若し佛教が、議會に依る改良主義と云うようなものを探るようなことをすればそれは腐敗墮落だと云うように矢吹さんは言われましたが、そういうような政治行動をするということは何故腐敗墮落かということ、佛教の本質に反するからであります。そうすると佛教は政治的行動をやらずして社会を変革しなければならない。現在の社会が良くないということは矢吹さんも認められたのでありますから——どういう風にそれは良くないかということは細かく伺いませんが——何しろ共產主義社会が宜しい、現在の私有財産制度を認める宗教は宜しくないということ、矢吹さん自身認められたのでありますから——。

矢吹 そういふ言い方は止めて下さい。大変な誤解の因になります。私の言つたのと違つている点があります。

### 佛教主義的変革とは？

村山 どういふ風な誤解か分かりませんが、何しろ、政治的手段に依らない何か非常に漠然たる変革を佛教は志してられるらしいのですが、凡そ世の中に是程可笑しな変革はないのであります。若し意識だけで以て社会制度が変革されるならばとうの昔、世界中の沢山の宗教が何とかして居らねばならない。所が社会は益々悪くなって居る。佛教の如きは大変に昔から存在して居る。所が少しも世の中は良くならないのであります。で将来も、必ず、其意識だけを変革することに依つて社会を変革するということは単なる幻を逐うに過ぎないということを断言したいのであります。又矢吹さんは、先刻から、此点に付ては余り触れたくないというように、ハッキリ逃避して居られるのであります。要するにどういふ社会が宜いか、又それを実行するにはどういふ手段が宜しいかということに付ては、佛教を信じて居られる諸君は全然説明することが出来ないのではないかと思うのであります。若し又それを説明しようとすれば、攻撃が内部から起るとか、——尤も警視庁からの攻撃でないから、甚だ穩健であります。そして警視庁の攻撃が来るまでは無論おやりにならないと思うのであります。——単に意識上の変革を問題にしてすら佛教の内部から色々の問題が起るといふ程に無力なものに現在の社会制度が変革されるか、成程言葉の上で言えば右でも左でもない、中間を取つて改良して行くというのは、如何にも穩健で宜さそうに思いますが、併しその中間の道というのは、何物をも意味しないホントの夢に過ぎないというこ

とを断言したいのであります では××後はどうなるかという、××後には、佛教は理想の社会が来たと云ってよろこぶかという、そうではなくて、×××社会をもとへ戻そうとする反動的なものとなる、即ち癌であるということを申上げて、佛教徒の持つて居るもう一つの夢を打破して置こうと思う。

木村 只今、村山さんのお話は洵に痛烈に感じたのであります。マルキストが生命を捨てて色々苦心してやって居ることは、そのことの是非を別として、お寺の中に安閑として居る佛教徒が憤死せねばならない程の努力として、私共は、其点は虚心坦懐に認めるものであります。又佛教徒がその本務として尽すべき所の義務を怠っているのみならず自ら腐敗して居るということも、亦吾々が率直に之を認め、此点になりますと、私共は或意味からすれば弁解の余地がないのであります。併しながら、それにも拘らず、然らば寺を潰して宜いか、佛教自らが社会から辞退してそれで宜しいかということになりますと、私共は何としてもそれを承認することが出来ない。之は単に自分が佛教に関係して居るが故というような意味ではないのであります。

### 経済的改革のみにて真の幸福は得られぬ

又根本的問題になるのでありますけれども、矢張りどうしたって経済的の社会改革だけで、それで人生は真の幸福を得られるものでないということを信じて居るからであります。之に対して本荘さんは、彼岸の世界なんと云うものは丁度ミローのヴィーナスの如きもので実在するものではないと言われましたが、私は或意味に於て之を認めます併しながら本荘さんに御問い申しますが、ミローのヴィーナスが実際世界にない美人だからとて斯の如きは無用であると言ってそれをおっぱり投げて置きますか。恐らくマルクス教徒と雖も之を芸術上、非常に尊重すべきものとして、博物館か何処かに珍重して置くではありませんか 即ちそこに人生は食うことばかりでなく、食うこと以上に精神生活の必要を認めるの証拠とならぬのでしょうか。宗教も或意味からすれば芸術と併ぶべきもので而も芸術以上に吾等の生命に喰い入っているもの、芸術以上に深き吾等の要求に根を置いたものであるということを考えて見れば、彼岸の世界は実証しえないものだからとて、捨ててよろしいという論理が成立しないのであります。併しながら、かく一般的に宗教と申したからとて、私は鰯の頭も信心からというようにいかなる宗教でも、よろしいという意味で、宗教を肯定するものではありません。宗教の本質は必ずしもロデカルなものでないとしてもそれを合理化し、美化し、道徳化した所のものに於て、宗教の高い人生観的文化的意義を認めるものであります。そしてそういう点から致しまして、私は矢張り佛教は、世界の宗教の中に於て最も進歩したものであると、正当視さるべき根拠に基づいて私は確信しているのであります。而もこの佛教は哲学ではある民衆に直接に接触すべき宗教である限り、佛教精神によって民衆を導く機関として、根拠地として寺院を要求するのである。今日の寺院には色々改良の必要はあるけれども、とにかく佛教は、単に大学の研究室に納まらないで何らかの形に於て、教団として存在しなければ其機能を發揮することが出来ないとは私の固く主張する所であります。そしてそれは、社会なり国家なり民衆なりの幸福のために欠くべからざることと思う、私の確信に依れば、如何なる社会改革が来た後でも——段々の御話によれば労働者の如きは迅速に宗教心を失いつつあるということですから、若しそれを真実としてもそれは要するに、現実の経済的困苦の事実と非宗教運動の宣伝上手に乗せられた結果で——一度平静な地位に立帰るならば必ず宗教に戻

る、佛教に帰って精神的安心を求むるに違いない、況して初より佛教を捨てないで、それで安心して民衆の沢山ある限り、どうしても佛教教団を維持してその機能を發揮せしめねばならない。そしてその機能というのは、何と申しても第一義としては精神的安心を与えるという所にある

### 百の説教も一椀の飯にしかずとは佛教を知らざるもの

近頃の佛教徒の中には百の説教よりも一椀の飯を与えることが佛教徒として現在の社会を救済する所以の道であるというようなことを申す人もあるそうですが斯の如きは、佛教の何物たるかを弁へざる所の非佛教徒であります。佛教徒は精神の安心が第一であります。一椀の飯は、飯に飢えて居る者に対しては隣人が持って来て与えることが出来るけれども、飯にも飽き、色々なものにも満足しながら、尚お絶えざる憎みある者に対しては、唯々宗教的信仰のみが眞の安心立命を与えることが出来る。之に対して宗教家の任務を社会事業家たる所にあるかの如く解し、今のプロレタリアの苦しみを取り去ることが宗教の任務である、苦しめる者には、それ故に金を与えよ、飯を与えよ、そうするのが宗教家の任務であるというように考える者があるならば、宗教の何ものたるかを知らない者である、能く近頃佛教徒の中からもかかる声を聞きますが、私はかかることを主張する佛教徒に対してはマルキストと同じく挑戦する。とにかく、かかる意味で佛教が何等かの形に於て、生きた宗教として、従って何かの形に於て、教団として飽くまでも存在を主張する所以であります。併しながら、それであるからと言って、私は決して、佛教教団は単に精神的安心さえ与えて居れば、それで宜いということを主張するものではない。否寧ろ私自身としては——自分が一学徒として色々なことを研究している傍らに於て、佛教が實際社会を指導するの根本精神をいかように樹立すべきかに関しては常に苦慮して居る。物を通さないで、単に孤立した所の心の安心だけではないか。物を通して、心の安心が得られなければ眞の安心でないということは、私は演説にも論文にも常に主張している所であります。極楽世界は空想であるというようなことを言いますが、併し私共からすればあの中に今後拠るべき所の社会指導の原理があるということを考えまして、そのことを或機会に発表したのであります。兎も角今日の教団の現状から言いますれば私は不安此上ない所のものである。従がって吾々は若し教団人であるならば——私は只今直接に教団のために働いているものではないが、——教団人であるならば、自ら省みて大いに懺悔し教団を改良して生きた社会にタッチして血の込むようなものにしたいと云うことは予て念願として居る者であります。併しながらそれ故にマルキストが申して居るような、物質を以て本質とせよと云うことは私は断じて言はない。精神生活を根本として、それに依って飽くまでもやろうとする。殊にマルキストが頻りに問題として居る所のプロレタリア・ブルジョアの対立と云うようなものは、マルキストの云う如く爾くそうであるかどうかは疑問として居るのでありますが、併し与えられたる現実として、貧富の懸隔が激しくなっていく、悲しむべき事実は認めて居るのでありまして、之に対して佛教は必ず根本的の、日本の宗教として、佛教は必ず之に対して救済を与えねばならない義務あるものとは信じて居るのであります。けれども、併しそうなると或は妥協的になるかも知れませんが、矢張り飽くまでも精神を基礎とし、同情を基礎として、単に制度の変革、或はプロレタリアートが支配権をとると云うようなことでは、本当の改革が出来ないものであると信じて居る者であります。で此点に対しては、私はマルキストに挑戦すると同時に、教団人としての佛教徒に対しても大いに挑戦したい。



### 宗教は安心獲得の一つの途で唯一の途ではない

本庄 大分時間も過ぎましたが、結局只今木村さんの言われたことは最も宗教の本質を端的に言われたのであると思う。結局宗教の本質はそれだから、それでマルクス主義が之と協調出来ないと私は思う。宗教と云うものは安心を得ると云うことが唯一の眼目であります、それは唯々安心を獲得する一つの途だと思うのです。宗教と云うものは安心獲得の為に求めた一つの途で、唯一の途でないのであります。安心と云うものは何時迄も求めなければならないかも知れませんが、其時に、唯々宗教に依ってそれを求めると云うことが、今日の社会意識と両立しないと思う。と云うのは至極簡単で、申上げる必要もない位である。宗教は安心の求め方が第一に個人的である。三千世界が引繰り返しても自分自身が安心であれば構わないと云う訳であります。第二は心理主義、そう云う点が吾々の生活意識と添わない。其求め方が——安心を求める為に考案された一つの途として、其途が成立たないと云うこと、それから終りに只今私が佛教の寺を壊したいと言ったのは、そう云う訳でなくて、奈良の東大寺を、あの当時の薩長政府が壊し掛かったのをフェノロサが止めたように、美術として保存記念物として遺す必要があろうとは十分思っています。それからヴィナスの御話が出ましたが、ヴィナスというのは依然として現在の人の中ではなくても、其美であるということには変わらないとのことですが——併しながら又一方から考えれば、其時代々々に依りて、新しい美というものが出来来ます。ロダンの腹の皮の弛んだ老婆なんか飛び出します。それにはロダンは注釈をつけて、如何なるものもそれが在るべき所にあれば美である。……安心の求め方も十分に、弁証的唯物論的見地から私は成立出来ると思って居ります。否、安心を求めるというような考え方が如何なる謬見から出来来たか——心理だけで解決しようという見地の誤謬を棄却出来ると思う。最後に私は、愈々今日はこれで私の発言は最後だと思いますが、只今村山君の言われたことには私は全く同感であります。

あの米国のスチムソン全権が愈々紐育を出る時に、米国の上院の議長である所のボラー氏が云われた、新聞記者を顧みてニコリと笑って「英米戦いの可能性は十分である」と云った。成程米国は、固より英国の地盤を食い込むことでなければ、それ自体が潰れるか、又戦うか、此の二つしか途がない。又日本資本主義もあの輸出入の頭である所の紡績業も印度の関税問題で国際的矛盾に面して居る。斯ういうような「事情」が私達に道を与えて居る。決して、勝手な新しい社会を持ち来せよと云って、救世軍のように太鼓を叩いて居るのじゃない。其「事情」が——私共の毎朝見る所の現実が私達の上に、宗教では包み切れないもの、別なる途に依って解決し得る途が展開されつつあることを告げて居るのでありまして、そういう点の十分なる反省と覚悟と自覚とを以て進んで行きたいと思ひます。幸いに今日の協議会が甚だ有利なことに終始しました。今日の私の発言は之を以て最後としたいと思ひます。

古野 丁度今の所時間は予定通りになって居りますけれどももう少し延長致しまして、其間に、発言して戴かなかった方の十分御意見のある所を吐露して戴いたら、非常に協議会として有終の美を全うするものと思ひますからどうぞ御陳述願ひます

### 佛教とマルクス主義 (12)

## マルキシズムは宗教哲学でなく佛教は社会科学でない

宇野 別に立つて言う程の問題でもないのですが、今佛教がどうであろうということから、宗教の定義といったような問題に話が逆戻りしまして、結局佛教は安心を与える、求めるものだ。そして宗教というものは安心を求める為めの問題だということになりました。そしてもう一つの宗教としての佛教は救済するとか救済の力があるとかいうことが出ました。是点は私は此間から二、三のものに書きましたが、一体宗教が人を救うとか、社会を救うということは宗教の目的でない。寧ろその結果として、或は一つの機能として現れて来るかも知れませんが、宗教は救済や安心を目的として出て来るのではない、私はこれを本能論ではないけれど、止むに止まれずして出て来る所の私共の一つの感激の生活と思って居るのです。ですから之を社会の変革だの、今の社会が宜い社会に改善される云々という問題のあった時に如何なる宗教でもそれを具体的に説いてどんな社会が理想的であるか、或はどうして理想社会が実現せられるというテーマを発見し、描き出し得るものは沢山はないと思う、宗教思想の中にそんなものに触れたものもありますが、それは宗教としてはむしろ偶然である、佛教にした所でそれは社会科学でない、此意味に於て佛教に対してははっきりと理想社会を描き、乃至理想社会への実践を示せということは無理な注文でないかと思う、先程矢吹君に言われた言葉の中でも佛教は食うことが目的でない、食うことはどうでも宜いというのではないが、パンを食ってからどうするという問題、食った後の問題であるといわれたが、私はそこに意味があらうと思う、併し佛教の歴史で斯うであった佛教の教は斯うであった、三階教で斯んなこともあったということの矢吹君の言われたことを唯佛教の過去を物語るものという諒解の仕方もあったようですが恐らく矢吹君の意味される所はそう云うことからして未来の佛教はから先の佛教への一つの暗示乃至制度自身を答えられたのでないか、私は如かく諒解した、要するにそう云う立場から云えば佛教ばかりでなく、私共から云えば宗教は経済上の変革とか或は社会の改造、乃至理想社会の実現と云うことを決して無用と言って居るのではないが、其経済的政治的変革がついた後をどうするかという問題を考えるのである。それだけで人間が生きて行けるかと云うことについて、マルキストはどうかなるだろうということかも知れない。此点から云って、マルキシズムは宗教哲学ではない、佛教が社会科学でないようにマルキシズムは宗教哲学でないから、其先は物語らない、是が正直な所でないだろうか、それを科学の名に於てマルキシズムが否定するとしたら私は科学の領域を越えて居ると思う、科学の名に於て少なくとも科学主義や哲学の持つ範囲に入りはしないか、厳密に科学そのものの立場を守って其限界に踏止まるならば、私は夫以上宗教の取り扱い問題に対して云々すべきではないだろうと思う、而して宗教乃至佛教からも夫以前の経済社会は寧ろマルキシズムにある程度まで任すべきではないか。政治に欠陥があるとか、経済などの現実の問題についてマルキストが科学だの、理想だのと云うことを物語る時に、佛教の物語るものは、今の社会科学の後を物語って居るのではないか、それから先ばかりを言うのではないが、若し仮にマルキシズムのいう社会組織の変革が出来て、しかも社会科学がそこに限界を見出すならば、人間社会はこれだけではいけないと云うことの主張にまで佛教は進み得ると思います。先刻の矢吹君の御話がありましたように、茲に畑の違った二人がひよつくり出会ったと云う感じがしたのです。皆さんの御判断はどうであったか、自分の諒解を

述べて、問題を少し鮮明にして置くため一寸発言を許して貰った訳です。

## 佛教とマルクス主義 (13)

### パンの後の問題はパンの問題を否定し得ない

長谷川 要するに先刻村山木村御両君の食い違った御話がありましたが、村山君の御話は木村、宇野両君のいわれた後でいうべきことだと思う。そうすればそこでもう解決がついて居るのじゃないか、聴衆諸君は、それを引繰返して御聞き下されば結論が出ると思うのです。然し私自身の考をいえということですから一寸簡単に……今木村さんは宗教と云うものはパンを食った後の問題だと云うようなお話でありましたが、マルキシズムはパンの問題なんです。パン以後の問題を持ってきてパンの問題を否定し得ると云うことは言えないのであります。生産組織の問題と云うのはつまりパンの問題でありまして、現在の生産関係を変革しなければ其問題が解決されないと云うのがマルキシズムの見地なんであります。佛教が若し今日パンの問題をもため社会に於て存在理由を持つとか、将来社会が変革されてパンの問題が解決された後に入用だろうとか云うところは別として、今日存在理由を主張するならば、今日パンの問題を持たぬ社会があるか、又は佛教が今日のパンの問題に就いて如何なる機能を持つか、それをいって戴くと、佛教が現在存在価値を持つと云うことを言われたわけで、マルキストはそれを承認するかしないか議論することは出来ると思うのですが、ありもせぬ飽満社会の仮定の上に立って存在理由を主張されるのでは困ります。パンの問題が佛教で解決されないことは佛教家諸君も御認めになって居るのであると思うのですが、そうすると今日佛教の存在理由を主張する根拠はないわけですから——今なくても将来湧いて来るだろうというのでは、現在のことを問題としている場合、議論にもなりません。所で将来の安心と云うようなことを、何で佛教徒が今いふかと云うことが一つの問題であります。今日の問題でない遠い将来の問題を、何故いふかと云うと、詰り将来必要であると云うのは、実は今日必要であると云うことをいおうとして居るのです。将来のことを話して居るようでもありますけれども、それと同じようなものを現に彼等が要求して居ると云うことをいって居るのです。やはり大切なのは将来のことではなく、現在のことなのです。「パンに飽満している社会」というのは仮定ではなく、現在、彼等の階級がパンに飽満して居るのです。それ故に飽満した後のものを要求して居るのです。詰りブルジョワジーの態度を言っているのです。それは今日少数ブルジョワはパンに飽き、多数のプロレタリアはパンに欠乏して居ると云う事実に対して佛教家は解決法を持っていないということです。現に佛教はそんなことは何うでもいいのだと云うことを今言われた。然しそういう佛教の立場も畢竟は、一部の人がパンに飽いて、他の多数の人がパンに欠乏して居ると云う社会の組織から発生した態度なのであるから、多数人が欠乏し少数人が飽満すると云う組織はない所からそんな宗教も生じない筈であります。多数人をパンに欠乏する状態に置くことによって少数ブルジョワが飽満して居る現在の組織から産まれたものが、その組織の変革なんかは宗教の本来の目的でないというのは当然の話です。パンに飽満して後の要求だとか云うことは、だから実は後のことではない、現在の彼等の要求であります。哲学はつまりそう

いう観念的態度を擁護する道具です。要するに貴方がたは将来のことをいって居るのではない。現在の階級的立場に於ていって居るのです。それから先刻、何か御話があったが、一寸……忘れましてから後にしましょう。

## 佛教とマルクス主義 (14)

### 時代の変遷と教団

川合 私は教団の問題に付ては大して意見を持って居りません。只今長谷川さんが、マルキストはパンの問題だけを考えていると仰ったのでありますが、パンの問題は無論大切であるということは、矢張り佛教の方々でも否定されはしないと思う。唯々私の考える所に依りますとマルキシズムの考え方というものは、パンを以て総てを解決しようという所にある。そこが佛教の方々と相容れない立場ではないかと思う。マルキシズムはパンの問題さえ解決が付けば終極の理想の社会、——理想ということはマルキストの方々はあまり好まれないであります——来るべき共産の社会というようなものが立派に成り立つという一つの楽天的な独断の上に立って居ると思う。所が佛教徒の方々はそれと反対に、一つの理想というものを立てて——或は佛教に於ては社会理想はないというようなお話もありましたが、併し佛教の中に寂光浄土を此土に実現するというような思想も存在して居るように思われますから、矢張りそういう理想を追って、今矢吹さんの仰ったような具合に、理想主義的と申しますか、兎に角それに向かって進んで行こうとする、斯ういう所に私は佛教の立場があるのじゃないか。そうすると、そこに於てマルキストの立場というものと、佛教の立場というものとは、また元へ戻りますけれども、矢張り根本的な反対が存して居る、此反対は、私は何処まで行っても解決のつかない信念の問題であると思う。それから教団の問題でありますが私共のような傍観者から見ますと、佛教の教団というものは、今日厳然として立って居りますけれども、例えば真宗ですね。真宗なんというものは本来教団とかいうようなものはなかったのではないか。親鸞は弟子一人も有たずで同行者、同信者があっただけのもの、所詮職業的僧侶というようなものはなかったように思われますが、それが段々進んで参るに従って、厳然たる教団組織というものが出来て来たのであります。所で佛教の方から言いましたも、又マルキシズムの方から言いましたも、万有流転で凡るものが流れる、というのであります。教団であつても流転は免れないのであります。今日の教団であつても、少なくともその形式の変わる時が来るのであります。併し宗教なるものが存在する限りに於ては教団というものは何らかの形に於て存在するであろうと思われる。さて宗教の生命であります、私の信ずるところでは宗教というものは、人間のあらん限り永遠性を持っているものであると思う。其点に於て、木村さんのお話もありましたが、私もフォイエルバッハなどなどある点に於ては同じように、宗教なるものを以て、吾々の人格の反映だと見たいと思います。反映という言葉が面白くなければ吾々の人格の構成になったものと見たいと思います。吾々が人格を有している以上、そこに何等かの形に於て宗教というものが生れて来るのではないか。而してそういうようなものが生れて来るとしますれば、また教団というようなものが何等かの形で自然に起って来るのである

う。が併し社会の状態の変るに従って其教団なるものもまた変って来るであります。其点に於ては、或意味からいいますと、マルキシズムの立場に立って居られる方等と必ずしも意見が全く反対して居るとは申しませんが、マルキシズムの立場に立って居られる方等は、そういうものは資本主義なるものの必然に亡ぶべき運命を有っている以上、共に亡びて了わなければならないと考えられるのではありますが、私はそうは考えないという点に於て意見を異にして居る。私は唯々以上のことだけを申し上げます。

### 農民の疲弊と宗教教団

服部 今までのお話で、佛教とマルキシズムとは、何か違うもので、それを結付けるとは機械的結合であるというような見方が、此処にお出での佛教側の方々に依って表明されたように思うのですが、之を私共はそう考えないのであります。今日佛教とマルキシズムという問題を論ずるに至った根拠は、実に教団其物の中にあるとそう見るのであります。決してマルキシズムが流行的な議論であるから之と佛教とジャーナリスティックに結付けたいという意味で中外日報社が今晚開いたのではないと思うのであります。その所の根拠を探って欲しかった。そこに於て初めて佛教の立場もマルキストの立場もきわめてはっきりと出るのではないのでしょうか、併し今晚はそういう所まで行かなかったということが大変遺憾に思うのであります。簡単に申しますと、今日の教団は、決して先刻から論ぜられたような佛教だけにかかずらって居ることが出来なくなつた。それは政治にも、又農民問題にも関わらなければならなくなつた。そういう風に佛教以外の方面に関係しなくちゃならなくなつたことが佛教徒とマルキストを結付けた一つの問題であります。だが最も重要な問題はそうではなくて、教団自体が自壊作用に今瀕して居る。それは教団の殆ど八十パーセントというものが農村に根拠を持って居りまして、其農民の疲弊、農民の財力の欠乏というものが今日例えば教団内部の自壊作用の原因をなして居る。早い話が、農民がなければの財布をはたいて、——本願寺あたりも年々多くはなつても年々少くはならない所の物質的の要求を、農民の宗教心に依って出させている。それを末寺が取立てて行くとすれば、農民の財布が乏しくなるにつれて末寺と本山との対立が、宗教上のイデオロギー如何に拘わらず出て来る。末寺自身もほかならぬ農民の財布に依拠しているからです。此のような教団内部の矛盾は、階級制度の矛盾の結果であります。其矛盾の解決方法として、マルキストがそこに居ようが居まいが、宗教家に課せられて居る問題であります。所で此の問題を解決して行こうとすれば、どうしてもそういう教団の内部の矛盾を惹起した所の社会の矛盾とぶつからざるを得ない。

### 教団の有機的自壊作用とマルキシズム

かくして始めて有機的に、教団の自壊過程というものを媒介として、マルキシズムと佛教というものが具体的に結びつけられて来たと思うものです。それで若し次に機会があればそういう認識の下に立って、此教団というものを、現在の教団の矛盾というものを、佛教は如何に解決せんとするか、又マルキシズムの見地からは、其佛教が如何に無力であるかということの批判が続けられて行くべきではないかと思ひます。

## パン問題の解決理論と人生根本要求の宗教

木村 段々と御説を承りまして、矢張り度々繰り返すようでありますけれども、どうしても此佛教徒の立場とマルキシストの立場とは、先ず根本に於て両立し得ないと云うことがはっきりしたように思うのであります。吾々はパンの問題と別に宗教的要求は人生の根本的要求であると思う。マルキシストはパンの問題が宗教を起したのであるから、パン問題が解決されると宗教心は自らなくなっていくのであると言われるようであります。是は全然意見の相違であります。マルキシストが生きた現実の問題を捉まえてパンの問題は斯う斯うであると言うから現実を主とする民衆に受けるが、其点になると、宗教的要素に基く信仰は実証的にこそ明示し得ないだけ迂遠のようですけれども、併し人生の最大なる要求と云う点から言いますれば、私は矢張りパン問題以上に深刻なものであると云うことを固く信じて居る。そう云う意味に於て、私共とマルキシストとは両立し得ないと思うから飽くまでも戦いを続けましょうけれども、併しそう喧嘩分れでは、面白くありませんから、少し協調点のことを述べますならば私共がマルキシストに感謝する点は、教団の是非とも注意しなければならぬ所の色々な社会問題を提出して呉れたことであります。解決の方法は違うとしても、兎も角生きた事実を痛切に指摘して呉れた点に関しては御礼を述べます。又、マルキシストの方からすれば佛教の世界観とマルクス——レーニンの世界観とは幾多の共通するものがあります。例せば流動観の如き因縁観の如き弁証法的考察の如きことであります。是は歴史を申上げると長いけれども、要するに釈尊は、当時、一方には純唯物論者を控え、他方には基督教に似た一神教的婆羅門教を控えそれを止揚してその教を建てられた結果として、唯物論に基くマルクスの世界観と共通するものを産み出したものと思う。而も此点が、本荘さんの言われたように、根本精神に於ては合致しないとしても、物の見方又は考え方と云う所に於て、佛教は可成りマルキシストに寄与する所があると思うのであります。日本のマルキシストのやっていることは余りにも翻訳的で、少し情けなさ過ぎる様ですから、一ツ日本のマルキシストは、佛教に依ってその世界観を豊富にし且つ訂正したならば恐らく宜いお土産になるだろうと思う。要するに私共はマルキシストに依って提供された種々の問題に関して大に啓発される所のあったことに於て感謝するのであります。御礼には、若しマルキシストの方でパン問題以上のことで大いに煩悶でもなされた場合にはどうぞ佛教を・・・・・・・・。(満場笑声)

## 宗教は腐敗した時に教団を構成する

長谷川 先程忘れたのを思い出しましたから一寸——。佛教家諸君は教団の腐敗して居るということは認めるというお話でありましたが、これは聊か訝しい。一寸結論だけ申上げるが佛教の教団が腐敗して居るというが、元来、教団というものは腐敗したから出来たもので、宗教は階級的目的に作り更えられると、即ち腐敗すると、教団になるのです。腐敗しなければ、宗教は制度にはならねばならないが教団にはならない、というのが私の考えです。昔の、原始共産制にどうして寺院が生じたかという、共産の生産物を集積することを管理する人間が、その集積を私有財産化することから僧侶階級が生まれ、教団が産まれたのである。原始時代の「僧王」なるものがそれであった。だから教団というものは腐敗を条件として出来たもので、腐敗しない教団なんてものはあり得ない。教団は始めから終いまで——今日の教団でも、共産制的集積を私有財産化し

ているものなのです。即ち腐敗が教団を作ったので、教団が腐敗したのではないのであります。共産財を勝手に処分して飽満しよう、パンに飽きようというために出来たものが教団であります。パンに飽満した人達のための組織であり、そういう人達の観念の城砦であるのは当然であります。

**古野** 約三時間半に亘りまして、マルキシズムの立場から、佛教の立場から、非常に御熱心なる談話会を開催して戴いたことを厚く御礼申し上げます。若輩私の如き者が烏滸がましくも、平素色々の意味で指導を受けて居る諸先生諸先輩に対して、進行係という可成り無遠慮な役割を致しましたことを御詫び致します。熱心に対議して戴いたことを感謝致します。又同時に、約三時間半の間清聴して、斯ういう談話に御興味を持って聞いて戴いた傍聴者諸氏に対して、御礼を申し上げます。(完結)